

小精庄雜載

震興餘錄  
吳餘新題

九

大正十二年十月中浣起筆

特別  
14  
1919  
357



小幡廣雅載

大正十二年十月八日起筆



○早稲田大学の換算を、輕微の換比を直接向換の換比も  
 念へるものとるもの以上ある、表面に換算をともあつてある  
 のと大津市の山岡地を用途にその定額を煉化煉聖の前  
 地大隈分館の土地をその換比に同じくして煉化煉聖の地  
 位の重なるものとるもの以上ある、表面に換算をともあつてある  
 の換算を折角算うに大隈分館記念事業の定額を換比に  
 換比申込文の定額をともあつてあるものとるもの以上ある  
 額の定額附者を都に置換此大者の内にあるから、換比に  
 見込かまの、地方に属する定額に換比をともあつてある

の申付波を交けて故病の言附●を課せしむ。此方面  
と雖も収入を納し難い。此の損失を永久の事にして、  
に差あり此の紀念事業に挫折し、五十萬圓位をのぞく  
取立ら出来ぬものを見ても、前のところを四九十萬圓、この年の  
減りも収入の減ることもや、修繕費もや、この年の月給を除く  
ことを合算すれば、無論万為を起さず、此大損失を交けし  
こん先き何んとも復舊を要するものと思つて、応用此等の  
実験をもバウウ式も七連をゆかざる、紀念講義を刊  
唐務室の規模を出来さることをワカチ切つてあるが、大津  
市をけあつて見んか、其代用も亦多くの言附あり。對し  
申付も或る規模の講義を建てしこと、此に己を導き、  
書張の束葉も大津市のせんりとも急む、之れも唐の災があつたら

くともあつたつもむ。延つて講義を行くまひ、さういふもあて河の  
も交金の貯り、内への納り切つてある、善後の事もあつて、  
で七巻の間に、今も七巻の講義の物集む、昨の維持費もあつて、  
と所へ、唐用にも十萬圓、大津市にも十萬圓、各三  
位とせん。是れ、せんり、七十萬圓を要する、而して唐の修繕  
こ、この七巻の講義を要し、文部省、大津市、唐の關係、出さる、  
る、この金、七十萬圓、要する、今も、唐の講義、出さる、  
田の金、この外、大隈邸、唐の、候、唐の講義、出さる、  
る、この金、七十萬圓、要する、今も、唐の講義、出さる、  
どういふ、と、唐の講義、出さる、今も、唐の講義、出さる、  
込、唐の講義、出さる、今も、唐の講義、出さる、  
分、唐の講義、出さる、今も、唐の講義、出さる、



あるに比命済むの資金を合つて二萬圓の金の募集が着  
手しに譯心あるところ、今度の震災は、一方財の申上り  
千やくらう、大隈家も二十萬圓拂つてあるが、残額七  
十萬圓を連ね出し、換うらうらうら、元来と四年  
間、全納の約束が、改て一年経過して、今仕拂をうら  
は五分の利子を納める約束も、三萬七千圓と、本  
利子すう、後支出う六つうい換ふ、窮境に陥つた、唯  
大隈邸内の或る土地も三千坪あるも、喜んば三十五萬圓や  
早業因位を出来る譯心か、いんとを、今直らると、その譯心  
由らぬ、あうし、どうも時効をえん、喜ぶ、さういふ  
さうく、三年以内、廿五萬圓(無利息)を納めるさうして  
残額五十萬圓と、毎年、五萬圓、無利息、二年、

納めると、んか、その後の力も、あうらう、あうらう、之れが  
流す、うらう、か、不通知といふ、今の家、こんと、あう、  
し、時効をえん、さう、地場合、地の提、あを、以て、協議、さう、こと  
と、さう、前々の関係も、坂本、其の衝、あると、いふ、論、他、二人  
二人、あう、あう、し、との、議、起、う、余、と、推、挙、し、さう、あう、し、い  
余、と、解、し、七、日、留、早、来、二、代、を、推、薦、し、理、子、今、さう、二、三、  
代、を、委、任、を、托、する、こと、の、内、議、を、さう、し、た、  
(十日午後)

A blank ledger page with 15 vertical columns and a double-line border. There are small blue triangular marks on the left edge and a small circle on the left edge.

十二  
拾陸

A blank ledger page with 15 vertical columns and a double-line border. There are small blue triangular marks on the right edge and a small circle on the right edge.

○興後古遺文を記す

十二

〇

方日甘露大雨を根

もりていせりといふ

あしすあけちを

唐村を架の上に

其後句と通し

いかに三十一文字に

してはに一文字に

あつては二十

ま

大日本国書院蔵



あり其まゝと流れて  
うそこふ道人排悶の  
後戯と家道に君子力一  
嘆に値せきんか

并

日之城  
とて  
標

(製會協明文本日大)

楊子江頭楊柳春楊花愁殺浪江人  
故声風笛  
誰言下吹花而滿海我白奈

あまきくく 柳の花をゆく風の行方七いぬ

この別の家

懐君属秋夜散歩詠涼天宜山杉子為幽  
八庭未賦

うら山のつちまひいきて松の空のこぼる

実目を君いぬべしや

さるもちこ柳色黄柳花歴乱木をたき香車  
不為吹愁去春日偏能惹恨長

くささあまきくく 柳をゆく風の行方七いぬ

うらもきこころしけり

終南陰嶺秀積雪深  
雪端木表の雪名城や  
増寺寒

夕々んばたるいゝ雲の纏りしりりか  
あゝうらみの雪

沅湘流不異  
屋宇照何深  
寺秋風起  
滿こ  
楓樹林

舟にのそむ屋宇が  
廟の楓木の風たのしみ  
秋のくたけ

白雲埋大壑  
陰崖瀉  
秋多  
應居  
西石室  
月  
照山蒼然

月夜し  
谷をうらむ  
くもの汝が

いはなこみおと  
おくまをせに

春暖河長  
即去舟  
微茫烟浪  
向巴丘  
沅湘  
春帰  
其の緑  
蕪香人自愁

又つらみの  
庭のぬき  
はの長き  
心をわぬは  
ものおちの浪のまじり

李白題  
石西寺  
古木回  
崖樓閣  
風は醒  
半醒  
花三  
紅白花  
子山  
中

やまの寺  
やるふく  
まの庭の  
面にあざ  
花見の  
酔のうらつに

震災録の二

前巻に災後の所感を画いてあり録し終ふことあり又  
青き漏れくじの現る事(中)を論ずる事ありことありを  
録し終ふに災録終とす

○この前の震災は日本を以て一等あるも三等國の後を以て何  
人とも大損失を蒙りては相違なき事なり最前の被害者  
とすと帝都の損失は百十五億と云ふ則ち日本の富  
の八分一が流びたのである

帝都全体を以ての損失は以上の如くであるが都民個人の損失  
ハ甚だ區々である同しく火災の厄に遇つたもの中一  
財産をすべて不動産としてあるものや資産を銀行に預け  
て置く物も比較的損失を少くするものがあるが貸付金

計を言してある款の事や火災保険の事を行概して家屋倉  
庫の火災の財産の全部の損失は人々今方の火災厄で全  
然無の事ある事ありては是れは譯してある今方の事や  
シテ人が震前とシテ震後状態を言つたにても見物めりつる  
ぬ、あうし信用状態が甚しく悪くした事あり(ういからうフ  
カリ震前の格を以て信すること、危険にありを言ふ  
ひても)

震災以後個人が財産を復興の爲め甚しく焦慮しての火災  
保険の問題はあつた日本火災保険會社を震災に依り生じ  
き不可抗力の火災の責任を負ひぬことありてある、隨て單  
ニ條規の上にもんを保險會社を普るの場なりとも社会の譯  
あるか、何か破格な處置を取らぬ事あり場なりあること



生命保険の方と火災保険とを全く趣を異にしてゐる。今度の  
の震火は死したものが十萬を超えてゐるけれども悪疫は  
甚しい時と此位の人を死ぬ。生命保険の例に於て死を  
しずしと大きな数に達する。況んや此處十萬が悉く被  
保人であることと云ふは如何なるの、且つ生命保険会社が  
しずくと今度の災難を支拂ふべき事と約廿萬の  
るが先年の流行感冒は十七萬の被保人であることと思ふ  
と割合は少くとも一と云ふてゐる。他の会社が七と云ふを以  
つて推し得るしと云ふは、生命保険会社の逸早く振  
出しを考へ出したのも無理な事はない。同じ保険会社でも火  
災の方を金額が如何なるも巨大である。多分に救して今  
度のことを勘定するも甚だしくつらう筋の事である。

見ゆらうのうぬと云ふの二十場所を陰におく。此處昔  
官廳七をなむを三者して善後を策せざるを得ま  
ないト口々云ふと火災保険と事あるをナリテ居るの  
一世にこの方のことと云ふも大震災が必しと起ると統計  
する事ある。これを主たる條件。火保の仕組を立てぬ  
とあつても直つて思致と一般である。

自分もこの方の震災に焼失の難に罹る事ある。此の  
呼びを出来ぬが、せんうしてこの家の傾き屋瓦の落ちる  
境の浴室や浴室を潰れ家を死す事あるに云聞入りの二  
階と云ふ隣り三階と云ふ隣り様。兼て此の千の方の入口、  
外に柏豆の此等三階帯し此の三ヶ所を取崩すことを由  
親りくせん、えを失つた丈も二三日の損失である。全部

破壊のあとも念を復舊するところば五六十円と一むきあつて  
目分として清く七軒徹の換言ひきりけりて火災に罹つた  
人に較べると大なる幸福者であるや、志うして震後庶民の  
手入を施しハラツシの浴衣に入ふ、破れた紙を張り、  
玄關七更の室に客と應接し、さきかきとまふと一羽  
て多し人、さうに極を氣かき、玄關の一のすまの入口の椅子  
あり、宛もこの後所の代書所もさうさうとまふさうかき  
あり、極、着衣の露をヤツト清くあふ、ついで極をさきかき  
アテさうの仕末があるは念せまむむ七コナ塩梅のある火災に罹  
つた大被害のあり境界と事想ひききさうさうさうさうのあ  
りあつてあつた。

の犠牲を無くすの時、さういふ極のあつて銀行との營業を  
始めるとさういふ極が無いおさうか、正午の營業時分に火災の  
起つた為には、帳簿を全廃せしむべきにあつた。さういふ  
一時拂出しを中止し、ある期間を越えても支拂ちを制限した  
と、未曾有の格事であるけん。日本銀行の震後の後援と  
人心の不安を別した、ユロク店をつけてても取付きとの取付  
と起つたつて、目録を金庫の二部して信用のあつた、いつても  
り七平穩であるが、さういふのを金を引出しをも拘り、買  
ひあつた、多くの金を所持し、その標本をさがさるる危険  
もある、銀行の引出さるるとも小切手帳を多く使つ  
たものもあるが、さういふこと、さういふ引出しか  
さうか、さういふ引出しの割合もさうさう、さういふ、一時

百萬圓以上は拂いぬ際、ひとく困難にして多くの人を苦しめて  
ある人々社工師らもいさ言あつた給料の拂、困つた無許一時を  
現金の拂、後、何れかをも買ひなすつた、とて、官吏もあつし  
てと俸給の前派をする特例も出た位であつた  
非常な天災の場合、時として大動亂がおこる、といふか、有者  
も言、一、大危機の、斯る場合、革命の如き政治的大動亂が起  
るといふ、容も鎮定が出来ぬ、革命の成功するのち多く  
斯る場合であつた、今も多まらぬ事、件、らあつた、とて、  
大寺と、そ、い、と、ぬ、と、見て、時、接、と、甚、危、険、と、あ、つ、た、が、お  
内閣が、崩、れ、七、山、本、が、大、命、を、拜、し、ら、う、と、ま、た、内、閣、総、務、長、あ、つ、た、  
が、舊、内、閣、を、演、説、と、ら、う、と、あ、つ、た、謂、つ、無、政、府、状、態、と、あ、つ、た、  
と、時、に、此、の、大、天、災、が、突、如、と、つ、起、つ、た、無、政、府、主、義、も、社、會、主、

義を、と、つ、た、と、逃、梁、の、時、の、あ、つ、た、と、す、と、此、樹、に、乗、し、て、ド、ン、と、大、事、  
と、悪、き、起、し、た、と、思、ふ、ぬ、  
の時代、の、あ、つ、た、と、多、大、寺、と、ら、う、と、い、ふ、た、い、な、し、何、さ、り、の、仕、  
合、と、あ、つ、た、併、し、事、を、い、ふ、と、あ、つ、た、心、動、亂、の、際、と、あ、つ、た、と、い、ふ、  
鮮、人、の、騒、ぎ、丈、が、よ、よ、の、可、減、を、人、を、怒、す、と、い、ふ、勿、論、流、言、半、信、半、疑、  
人心、の、不安、も、激、甚、と、い、ふ、層、鮮、人、の、騒、ぎ、を、大、き、く、威、  
せ、し、め、る、相、違、と、い、ふ、が、鮮、人、の、白、晝、横、行、し、て、大、火、  
を、起、し、た、と、い、ふ、一、區、に、放、火、し、し、た、り、と、い、ふ、放、火、し、た、と、い、ふ、事、實、  
を、目、分、の、よ、う、と、い、ふ、多、く、の、人、と、い、ふ、事、實、を、目、撃、し、て、お、  
ゝ、清、く、は、風、聲、う、瀟、々、と、い、ふ、彼、等、の、行、動、が、拍、を、  
奪、つ、た、と、い、ふ、と、い、ふ、決、死、的、と、あ、つ、た、と、い、ふ、亦、事、實、  
と、あ、つ、た、此、等、の、事、實、を、証、明、す、の、處、と、あ、つ、た、と、い、ふ、さ、ら、う、か、

日宣傳の本元と認む視座にあると傳へらん。又是で鮮人の  
 現行犯を捕らんとて私刑を加ふるのを認むるに待たずして  
 既に其の爲するに任ずる也。又事ここに至ると後、その四路  
 関係の多く抹殺をいつた。此等と鮮人の絶縁に浴び  
 一行の北より此の地に旋繞して北より北を去る。是れを抹  
 止するに極端に趨き、事ここを以て北より北を去るに  
 笑ひある。唯此より視察と能程濤張さん、此の地  
 てあり、鮮人の背後の北より北を去る、此の地を以て無きこと  
 未だ、北より北を去る、此の地を以て無きこと。此の地を以て  
 ぬぬ、此の地を以て鮮人の自費に任ずるとむ。此の地を以て  
 ある、此の鮮人の騷ぎに邦人が鮮人と漢を以て北より北を去る  
 もあり、又事ここを以て鮮人の自費に任ずるとむ。此の地を以て

電報方面よりみて労働黨の力を指押する。一種の主義者  
 位してゐる、然らば此騷擾を以て陰に陽に之れを煽り立て  
 此こと七年の間に事ここを以て今も其の首領株の殺害さ  
 らん。此の事ここを以て今も其の首領株の殺害さ  
 此後極の働ことここを以て北より北を去る。又一方として別  
 の小説と憲兵の手で殺害し、此事件も、尚ほ他も似寄  
 りの事件と追々及露としてあること。此の地を以て北より北を去る  
 の事件と鮮人の行為と連絡がある。此の地を以て北より北を去る  
 北王義高連の運動と連絡がある。此の地を以て北より北を去る  
 し、此の地を以て北より北を去る。此の地を以て北より北を去る  
 此の地を以て北より北を去る。此の地を以て北より北を去る  
 るのを、戒嚴司令部が敬告すると呼應して下サリケル。此の地を以て



厄役者も多しと托しを片付んとしたることある、大杉栄の一件の如きもその北の範囲に属する、電灯方面のをいしく故を笑し、河川へも罪をあたはるともふが、大杉の遺骸を井の中へ投し、土を以りて隠蔽し、飽を隠さんとす形跡あると同しく、島尾の七殺案後石油が遺骸を焚き拂つての殺害の跡を放りんとし、其の形跡を見ん心とて殺す迄の事あるを、下サリサる乗しを片付け畢つて、体よりバ知らぬ顔は満まんとして仕組むるべき殺害にあつた、若しハ切り捨テ免とすふこともあつたか、今と戒を令下し軍人に於る特権があるを、若し大杉其他の懐抱する意思を危険と云ふ故を以りて時殺回殺のことにすべしと云ふべし、此の意も、無政府主義者も七危

殺さぬと滑りてを得ぬ、流氷の向もあるものが、保護の代り、時殺を敢てしとあつても、彼等と鮮人よりもヨリ以上の不正あるありと謂ひ、若し大杉を殺し、世論大尉、一概に同族を容れせしめ、其の言をこれ、河川を以りて、今こそ下サリサの場合、天下の法議も黙してゐる、此の不法と後未暴露も核をさす、殺害を多けず、同主義者大なる刺殺を断つんこと、火を晴らす、此の意も、憲兵隊の行為と國家の爲の害物を除くにあつたとするも、その結果の寧ろ及ぶと出ることと思ふ、彼等の行動を愚くし、若し大杉の事もすべし、若し向後、コンナ事、刺殺するべし主義者がますます、勢を増し、革命的運動の起るとすべし、その助長の責任を、第一軍人に帰せしむべし

相違あり、然るべきを此の傍りの後であることを思ふ故に  
る、此の天災と恰うもある主義者の唱言(す)ることく形  
はけり、兎に角或つたのびあつて政府の一部の亡状を  
政府不用の藉口、口実を造つた故なり、此の危殆を  
る主義あるも無謀の行動を敢てする軍人その物がある  
彼等と主義あるもの思想を異にする、彼等を能く視  
し、或るものは殺し、或るものは換束し、此の換束(す)るべき  
換束あるも、威怒の故あり、今の世とある、(す)る  
苛烈の取扱を、(す)る、換束を、(す)る、  
○新(す)る、換束(す)る、(す)る、又主義あるも、  
(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、  
の(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、

善き記(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、  
人無謀の本(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、  
○牛(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、  
九(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、  
七(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、  
思(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、  
思(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、  
思(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、  
十(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、  
十(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、  
十(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、  
十(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、  
十(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、  
十(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、  
十(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、  
十(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、(す)る、

(十月十二日録)

人として自衛に依つて放火を防ぐかと思つた。自分の町内を  
とる最重の中にも最重だといふは、鮮人の入込を恐るる  
先つ要衝を扼して人を一々誰何し、何んへ行かぬやを尋ね  
何人を訪ふやを執し、疑ひしいと思ふと、畏怖のまゝの如く其者  
同伴して其家まひさる換ふことおもむかひ、各逃れりや各路  
決りて先より四五のいふうに來るやの如く、鮮人のむらりテラウ  
所を路次あると、その如く路次を何人も入ることを許さな  
うに位である。往々難者も其やを入るに不逞の如くもあ  
ると言ふ所も、難民とすを江戸川筋を(行せしめ)町内の  
通行を許さうつた。こんな自分の町内を一例として、今付は  
の如く、他の町内も大同小異なり或は三十餘日徹夜の教戒を  
せりた爲りの火災を免れんは救區に火子路を一つも無

つた。若し鮮人難者の恐怖に無つたら、震後の夜は、  
~~この~~ 難民( )の如く、子親らうの如く、隣保團結する  
素甚に薄弱の如く、各町に於て、或許の之んを、言ふ  
らうし、其の必要を教へたのは、此場合の如く、但し夜警を  
随分禁の如く、所々あり、如く、夜警を自衛奮の如く、殺  
す可き人を殺さう、夜警を名として人の物を擄めり、  
所々あり、夜警の禁ハ高唱をえ、刑事訴訟を惹き起  
し、例もあるが、そんな事多し除外例に属するもの、有るの如く、自  
治的夜警の大切であること、何人か認め、要を各戸其責に任  
じ、破落戸の爲する毒をさるもの、  
震後三日と或人と何人七家、納まらぬのを無つた状態に概ね  
戸外、の如く、家々破壊し、重傷を來る地震に怪我を重んじ

為のちあり電燈無く家う闇いと見えあつた。自分の家もいふ  
玄壇前、多少の空地がある。この通隣家の家族が二三組と長  
屋の家族をも避難せしめ、自分共七三日ぶらうらひ回換り  
を門の入口まで来た。そこよりあるに、今もここより一晩を今もこ  
こに眺め、雨の時もテントを張つた。多くの知人を見あひ来  
てくれれば、皆なこころよくて居指した。露をともす七のころ  
如きの経験がある。随分おもしろい。克星もあつた。大地は尤  
も安心の出来の所である。此處の間も随分可なり強う  
なり。屋上に残つた瓦を更らう。掘りいれを換ふことと無  
見ると来れば、人々自分家族の避難の様子を見て、語り  
合はる。物と思つた。いかに、實に自分の家の破壊の程が  
知らず、外面より見えぬ不ひひいと買ひ慰つたこと。追

々分つて、物も前を測先を一切取拂つた。と見て始めて破壊の程  
を知り、改めし見舞つてくれん。と云ふものも少くなくある。  
大震の従果土地の陥没低下を、元令元測計つた。おぼ  
洋の海岸を震前より四十尋も深くうらな所あり。河川を  
作り直すに、測量を要すと傳へてある。こんど海の中  
と、おぼ土地に、松をり本所測計つた。大体一尺以上も低下し、  
丸の内七五六寸低下し、と云つてある。元令元測計し、大抵  
多少も低下してある。いかに、江戸川筋を、三、四尺も低下  
し、所あり。これに、跡地がある。かゝる目録踏の多ひある。横  
濱も全体に、あると、一尺も低下し、とある。概して地  
盤の、いかに、所も低下し、とある。寺の家の、方む、陥  
没と低下と、區別してある。

○震後の出仕末々々々大層なことがある、今方の震火の区域  
と二重方面の海つらぬる、その焚火の灰の分量：計七割の  
灰の報するものも多し、厚サ平均八寸と見て約二十萬立  
方坪とある、この灰を七三萬七千立方坪の丸ビルの五倍の  
大塊のふるまると考へると非常の量がある、多分これを  
灰だけの針葉木と考へると、此の銀を日本橋迄の煉化家  
屋の取崩しの材料、火災を免れんば冬に薪に、薪部の各戸  
うら路上一出しに、重出や敷瓦や、産炭を合算すれば  
うら路の分量をうらむと、これを全列片付けると  
多くの日子と費用を要し、その捨場と式番係の埋ま地  
ら出来る澤山ある、

○丸の内ビルディングの残つたところのこの事業の足るは、

の便利を感じた、あの建物と似て全体を形作り、枕あるものは  
うら路のがある、この灰を日本橋の代用の為めと、此のビ  
ルディングを建て、時々強志も及ばうらむが、今と小規  
模を、その代用とらうて、死者の遺骨を、此のビル  
ディング内に出仕流の灰の出しを、本橋に焼け  
ても、衛生上、便利である、コンナ院舎の百に、灰を、  
灰も、将母と名ある、そのと、感せて、を得ぬ、  
今方の灰の大規模の火災、そのと、多分、の、こと、うらむ、列産、  
常の想像、ひを、想ひ、も、高、の、ぬ、こと、ある、本、不、海、の、木、坊、の  
ある、と、材、木、を、焼、く、現、ん、び、ま、る、来、つ、て、難、を、加、け、た、外、皇、  
代、川、を、と、ち、あ、方、火、の、あ、る、か、ら、河、中、焚、み、打、ち、と、ら、う、て、炭、の  
上、う、ら、拵、ん、ず、水、に、投、げ、ん、と、し、て、水、を、沸、か、し、て、あ、る、を

れり入る者ありといふ、その被害の中に入り火を起したるもあ  
る、烈火の附近より燃焼するを起して千七船に及ぶ、ついで  
たとえ、石や煉化の庫も燃焼火の内に入ると時、  
の炊入元はとも、  
又中の上の一物も残つてぬ、ぬいことも見る、  
度、火の燃焼は、  
橋を断れ、  
を高く捲き上げ、  
き上ると高く、  
かを燃焼し、  
こつとまりて後、

服廠並の捲き上り、  
公園の傍、  
り取捲き、  
とあとも千七船、  
つて火を煽、  
して見え、  
んむ七船、  
度の震火、  
の最後を、  
賑しいのが、  
終りの、  
終りの、

赤地附り



此病忘の罹つたよも格別多數であるともやうなぬ、友人菊池  
晩香が震後四日、自分を焼く事つて、死を以て悲観し、自  
分の倉庫が破れて、亦く珍花（此花は出雲七塔外部に取  
り去る事、頼まうに、ん、多摩奪が成る不起る事、うじ、皆  
校七田の如く、行かすいし前年）の生計も窮する事を云ふて  
あつたものも、手換く亭附しといふ事云ふて来れ、目今を感  
め、其の大早計であることも、説き、勸忠を個促して、還して  
比の三十餘日を、行かす死をの意、知を得比、先別式、詣りもやえ  
て見んが覚悟があつたもの、初めを、總名を、未組七田の  
可、区河七田感し、と云ふを、やまき、自分の高き、訪ねて来比時、  
既に其覚悟をし、比の比と自分を、その時の、換子の、事、うじ、ぬを  
追憶し、氣の毒に、堪へらう比、か、晩香も、多分、絶望する、神は

衰弱を、陥り、最後を、遂げ、比、よ、め、ある、もの、  
○今、この、火災、ひ、多くの、花、出、家、七、焼、け、る、もの、花、出、を、え、つ、比、黒、川、真、道  
と、浅、茶、の、家、う、あ、る、春、村、真、頼、二、代、に、集、め、比、圓、出、る、三、庫、に、満、ち、て  
ある、書、物、を、の、評、償、ひ、と、十、五、萬、圓、の、下、ら、ぬ、と、ま、ふ、が、幸、に、二、庫、が  
焼、け、の、こ、つ、比、と、ま、ふ、が、先、に、ド、ン、テ、の、う、入、り、て、焼、る、の、か、書、物、も  
外、に、残、量、の、あ、つ、と、も、ま、ふ、ぬ、真、道、に、取、つ、と、大、災、難、ひ、ある、天、全  
の、池、田、七、近、来、多、くの、圓、出、を、あ、つ、た、と、十、萬、圓、上、つ、て、あ、る、もの、書  
畫、と、數、十、萬、圓、の、もの、の、あ、つ、と、ま、ふ、が、ん、七、全、焼、に、似、し、あ、ぬ  
善、治、の、松、通、金、文、庫、七、焼、け、に、似、し、依、存、滅、害、の、花、出、の、料  
も、三、萬、種、ある、と、ま、ふ、ぬ、と、ま、ふ、が、ま、ん、ら、顛、了、稀、款、の、もの、と、ま、ふ、へ  
比、う、ま、ん、七、亡、び、た、前、巻、に、大、橋、圓、若、殿、の、助、の、比、段、入、誤、り  
誤、し、比、う、こ、れ、七、焼、け、て、八、萬、幾、千、の、圓、出、を、失、つ、比、依、り、木、信



編を自分の家が助かり逃つて免れぬ事を得たが、他は特別に  
傷り受けであった。右河家の元暦著書と並べ、他流家の所記不  
出の萬葉類を自家研究の次で、借りの受け、大正の研究  
室に置いたりの、焼けたて仕舞ひの、同時に院徳の研究し  
た信本正火燼とすつた、此の、氣の毒な例もある。

○京橋の中通り、とあるを、茶屋を賣る家のある、その主  
人と鑑識うらつて、高貴の信ら名を、博覧も得ん心之んを、受ら  
ず、自家の所存と、萬一、杯と名を、さす、例は、春の、多く  
の、名品を、集まつて、その、價格七、八、十、萬、円と、さす、その、ひ、ある、  
震災の、刹那、此の、主人、走せ、此、等、の、名品、を、花、め、居、る、庫  
の、戸、前、に、坐、して、運、命、を、庫、と、燃、る、免、危、怪、を、極、め、た、家人、が  
火、災、の、凶、り、の、見、警、い、て、此、の、免、主人、と、主、退、を、勧め、ても、い、つ、か、ら

勤らういの、ひ、と、も、多く、数、人の、数、丁、か、此、免、人、を、か、り、き、出、せ、ん、と、さ、す  
と、免、人、七、漸、やく、免、怪、す、す、不、あ、り、お、前、達、の、勧め、の、後、れ、主、退  
く、さ、す、且、と、待、つ、て、免、九、と、さ、す、ほ、う、せ、と、免、の、戸、前、に、端、坐  
して、こ、え、ら、お、別、れ、び、あ、と、恭、く、拜、し、て、こ、こ、に、主、退、い、と、と、さ、す、  
免、免、に、お、さ、す、執、着、す、す、い、の、免、り、免、の、情、ら、あ、り、く、と、あ、り、  
ん、と、免、ん、ど、も、あ、り、而、白、う、く、と、あ、り、

○昨暦の火災と地震の結果、此を無いか江戸の或人と全部を焼き  
拂つた江戸の町と、その後、面目を度、い、と、その、為、り、火、前、の、昨、  
の、江戸、町、を、新、的、に、比較、の、為、り、大、り、な、考、考、と、さ、す、その、地、か、こ、の  
地圖、を、願、う、稀、れ、る、もの、ひ、あ、り、その、ヤ、ト、年、入、つ、て、稀、書、後、  
書、金、を、後、知、り、し、の、と、稀、目、前、の、その、ひ、序、の、昨、暦、の、大、改、の、  
四、七、複、寫、を、試、み、その、出来、比、の、を、惜、ま、この、震災、此、大、の、為、り、

する故に前記の如く然るに歴々の倍する大火災の起つて東  
京の地固が一変せざるを得ないことあるに大地震の起つて目  
撃の高田管内等と大隈公館に何を相談しといふと今と今  
館の収入を圓の目的に演劇展覧会をいふことやパー  
セントを考へること等の計畫があるにパーセントの趣向を  
早稲田附近は大道道灌の遺蹟があると言所々、例の山  
吹の里をいふは組出若くは道邊の或る程なるを筆を  
めは譯むあるが、さる事も皆な地震と共に大泡の境  
しに志し、東京を恰も大道道灌時代の武蔵野の  
原と云ふよりも一帯の歴の圓の後刻や大道道灌のパーセ  
ントは何と云ふ識をうしてある様である。

○さきの焼出の仕末に煉の昔の人の知らぬことと工兵の種

々の活動である、鐵橋の崩れを破壊し、新に急後の  
架橋を考へるも皆な工兵の擔任であつた、煉化家屋の  
焚出の取崩しは亦工兵の擔任で、この事を爆裂薬を用  
ひて工兵と戦時爆裂薬の扱を破壊することゝ無念あるが  
平時のその練習を考へること甚だ困難である、マサカに  
満足な造り物も試験用の供すること出来ぬといふこと  
あるが、今や工兵の爆裂薬に待つことあり、或る多く、工  
兵も十数の志きり、破壊を待たせらるるが、まじいとして  
満ちるにその、昔の砲前の新も記す、扱ん、既に爆  
薬を三萬グラウ使用してゐるとの事もある、工兵の苦勞も  
一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

時の爆裂とあつて、後、其の周囲、種々、割る

すべき事であるから戦時のことと無難な二つあり、さういふ  
ゆえにぬ苦心地と云ふか、さういふ演習もさういふのである、工兵  
うま外に困難をいふと云ふのと、お茶の山の崖崩れを修理す  
ることであるといふ、女の狭い家、織造が架してあつて、さ  
か土基から崩れて水路を塞いだのは、作業の困難、想像  
の難ういふが、こゝの困難もさういふべきであらう、  
昔し仙臺炭の幸いさういふことあるのは、今も及七仙臺  
の工兵が選んで其衝を南にすることである、(十月十四日録)  
○震災は大厄であるが、寧ろさういふ火災が一層の大厄である、横  
濱のや湘南の遊樂地や別荘地の秋を激甚地の一震災家を  
将基例して潰し、この日と東宮とも軍と地震大い満  
人比とすも、コシナ大災害を見るうつたのである、厚薄の差を  
あ

れと地震の普通向にドーンと家屋も揺れ、そのあつて、さういふ  
五分、く、不幸不幸の別を火災をさういふと、さういふ火  
災、無けんが、助うを家も澤山あつた、何人か、さういふ  
損う、さういふと、さういふ、銀や日本橋の助の煉化家屋  
さういふ焼かすを、さういふ、脆く地震に潰れた、さういふ  
さういふも、地震に、さういふ、さういふ、さういふ、若し火  
災、無けん、さういふ、さういふ、山の千数區(焼け残つた)の  
さういふ、破壊も、さういふ、さういふ、修理も、出来な  
さういふ、さういふ、焼けて、さういふ、家の強弱を、さういふ、  
さういふ、地震、折角、壊れた家、さういふ、火、さういふ、同一運命、さういふ、  
さういふ、さういふ、先、七、災後、さういふ、さういふ、焼かすを、さういふ、  
さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、

煉化建梁が不備也震災大ビコシ有柳ノ崩潰シ此のてあら  
と罹を一概と建梁ノ滞シ此のて後建梁の事ノ家ノ間を  
又と、あん七地震ノ事此のて決シ建梁の脆弱を講  
ビアンナ醜態をあらリ此のて火の爲め此のて  
少くも地震と火災とを引離シ其の家の強弱を考ふる所  
ありと感シ此地震日後火災の起る近々相向の地此  
時間ありと云ハドシナ家屋ノ壊レドシナ家屋ノ壊レ  
るうらと、一ト通テ補査七出来、後の爲め此のて  
此のてあらうに、震災ノ伴ハ火災の例とモ或人と即時ニ起  
ル所仕末であるから、強キも弱キも差おらなマヤヤと  
るのて仕舞つに地震の感測の出来多ク災害があるから仕方の  
無いとモ、建梁法より防ぎ得ぬ限多現、いくモ

防衛物あり、火災を人間が防げ、防げぬものハ無い地震  
の防衛も、可成性が頗多、此のてある、モシモ防衛が  
出来地震の此大禍を落ク事、勿論である、  
震災の刹那の防火経之と今後復興ニ事、の王眼々  
々々を得ぬ、

○自分の家の火災を免んばと云へ家屋ありのて、奴換言を  
受け、応急の手当を、取崩シ此家の前面を復興す  
るのて、容易なるも無い、決シテノンキの河床にあり、  
爰ニコシナ橋合、不応の事、二ツある、ヤツト家を起シ  
て正位を復シ此のて後々、獨乙此の新しく、ヒヤノが  
舞ハ込人が来レ、此のて娘が、何のレヨルツ、頼人、獨乙、注  
文、此千三、田の價の、ある、事、此大前、他の二、三の



この凡ては、満足の洋装を穿ててゐるものも目立つて周囲と  
折合の如く、時儀や袴らしきを着けたりも人の笑を博する氣味  
があるが、皆を着流しのハシタリである。婦人も多くハハ  
しを以てつて、頸に手拭を掛ひ、禪をむをうけたりする  
く、化粧をしない盛装を穿たりし婦人も、侮蔑を  
受ける氣味があつた。電車のことき交通機関が全くと  
破れて、徒歩の苦しみもつたのであるから、誰か彼ん七旅仕  
度である。市中焚火の天燼が飛揚するのを、流感流行の  
ため一時行かん口も閉鎖を塞ぐマシが、復活し路頭  
に之れを燃やしてゐるが、あちこちの隅々見れば、ハンケチを  
ての中を穿ることも出来たりする。食事をせむし間こ  
合のせむしチヤブ基に、家庭も僕も手係人止等を集まうと成

る支手も有るといふ位、街が上下の階世として、全に撤廃さ  
て来たり、殆ど何も来たり家々上の人とあつたり戸を挨拶を満  
すす抑さす、自由に行き、随つておあづかるといふと云つた  
あつたり、さういふと云ふのは、こゝろを容う上つて、美事を出す  
ること無くて多く、誰か誰かを怪まらぬ抑さつた  
コナナ市、動機と云つて、商易生活が行つて来たり、いこ  
と相違するが、追々といふと、相違するのうと、困つた  
○北震災に諸外國の同情を蒙るに、中々も米回送早く  
寄附金や物資を贈り来たり、其物と言ふは、莫大なるもの  
ある我々十種く寄附して来たり、病院迄送附設備を、見比人  
の話しを穿たり、ちとの仙臺を、即ち高松の、海部

ハ如何にも廣く、いとの比が、そこを米國の原意に於ては、病状を  
ひらく事にして、中へ入る事をして満田テントに充ちてある  
現在とあるの患者を收容するだけの設備が出来て居る  
全体とあるの患者を收容する事と違つたもの、日寄館を  
てあるの比の不便もするこの為物を解くこと、出来ず  
三合の一大部物を置く事も積んた事とあるてあると  
この設備とある事も行儀の比とあり、ベクトルとあるの布團とある  
綿と入る事、枕と二ツ重めを毛と違入る事、元布  
と利上流社会をみるゆへに用ひぬるものとも、(運) 房と枕  
内外科、せに何一つ漏らすことなき、又支給せし細菌測驗  
室でも患く病あり、食糧とある人と半と年支へる臨時  
帯して居る、醫術の看護婦の寝臥するテント七個ハ二

ありて宜く行儀の比ともあるといふ、テントブルの中へと書簡  
集やインキや一切の文房具も備はり、甚不道徳な事と日本  
はテントを見ること、出来ぬ立派なバケツも七個ある、無毒  
戦時野戰病状とある其の設備をその通り持つて  
来たるものもある、いかに婦人の出生を備へるものも七個  
赤ん坊とを洗ふ盤も七個ある、赤ん坊と野戰病状の  
設備と更なる必要のものもかく此ところをみる、  
用事の周到なること、(野戰) 赤十字社むを何合も  
看護婦も他の手不足は、折角寄贈をうけ付け、設  
備も充分活用すること、出来ぬとある、然るに此等設備  
の敷設班も能く分を領つてやつたら、ボクナに都合が  
からうと何人も氣がつく、比が、そこ、こり日本の悪く、い

ナシナ場をいひて官省の受難う清溝を盡して龍面を許して  
ぬき、折角の米田の厚意も充分發揮せしめ、あし  
こむ柳多しこと馬鹿氣比ことひあり  
(十月十二日記)

○昨日の雨の来り下谷浅草迄の火後の状況を又人と、前中  
より出で付て見れば、五月十日の雨の信をいれ、その後初め  
この世家も廿日と、命のまが、林五つを狂を揺る、先づ電車心  
神田を走るつて見る、飯田町をこく、意のまが、バラックが出来  
てゐる、まが、軒を並べんと、まが、高店のバラック  
を割合に神速に出来て、お比、須田町をこく、下谷浅草を觀音  
前まで、の芝草も満目、焦土も、神田迄と、あつて、あつて、いかに、  
らも、バラックの、随分、出来て、お比、廿五日、つて、お比、出来  
ると、いかに、つて、雨、後、と、連、松、比、と、まが、神、田、を、通、つ、て、い、かに、あ

らうと、お比、つて、いかに、お比、つて、いかに、お比、つて、いかに、  
お比、つて、いかに、お比、つて、いかに、お比、つて、いかに、  
一寸、お比、つて、いかに、お比、つて、いかに、お比、つて、いかに、  
評議、お比、つて、いかに、お比、つて、いかに、お比、つて、いかに、  
こも、お比、つて、いかに、お比、つて、いかに、お比、つて、いかに、  
レヨンが、お比、つて、いかに、お比、つて、いかに、お比、つて、いかに、  
人が、お比、つて、いかに、お比、つて、いかに、お比、つて、いかに、  
火災を、お比、つて、いかに、お比、つて、いかに、お比、つて、いかに、  
災の、お比、つて、いかに、お比、つて、いかに、お比、つて、いかに、  
の、お比、つて、いかに、お比、つて、いかに、お比、つて、いかに、  
お比、つて、いかに、お比、つて、いかに、お比、つて、いかに、  
お比、つて、いかに、お比、つて、いかに、お比、つて、いかに、



女政の地帯も災禍を蒙るゝといふが今も七尾一杯飛んで  
 此より祝者をも入りて元氣かゝり七動揺を言はれたる跡の  
 認めえぬ、而論二王の御所の式基の石燈籠を以て皆焼  
 れた中見世廿二王門附近のヤ料地を以て二三火災を蒙るゝ  
 此れも皆る備を令る改に八九合するに及ぶ店を出しぬ  
 べ、流石に淺者の境界大なる蔚然たる樹木うちあつてよい心  
 持がしむ、どこもこも樹木のりもまじひぬて見ると青い  
 かいどく快感をも興くる、浅草交店に菊二三鉢を元受けし  
 庭樹を車に運ぶのみならず又受比が大度目立つて貴重品の  
 柄を感しうしむ、自合の庭を以て樹木が旧の如くむあつて  
 毎の元へ植るから自合とてと事だ珍らしく思ふ花もさ  
 柄にかまじりてゝ正土も身を互て見ると前陣のことき



カ一

カ三

カ四

感う起る、焼けた人々の自介をどうも強く感する。お車(あつち)の  
 日思ひに、成る、観音堂の背後に四つてる。行きの茶店  
 や行政改治部官をいふ。皆火災をうけ、つて此迄の樹木  
 と多く折つてゐる。十二階を歩くと、けしや、残つておれが、  
 爆破の元前をいふ。今之目煉化の果として、亂れてゐる。又  
 此親音前、乗合自動車、乗つて、駒形あたりに、花前  
 女房を(過)し、江を隔て、本所の有る部分と、遠く、  
 といふ。こゝも、目に入るものを、目撃し、夫、路、無数の、  
 既、建つてゐるが、天燈を、一面、片付て、皆、あ、高、寺、  
 校の、焚焼の、惨状を、見、浅、橋、橋を、こ、こ、日、生、橋、  
 出、此、北、二、區、の、る、を、日、路、と、折、つ、て、こ、こ、  
 き、海、の、へ、き、丸、の、内、火、災、を、急、ぐ、丸、丸、  
 十二

有、柳、之、前、に、も、寺、い、て、互、い、に、目、の、あり、見、し、  
 程、の、内、部、に、刻、着、の、人、が、曲、在、往、た、往、  
 如、を、あ、つ、た、り、ま、き、程、の、外、部、の、露、店、  
 といふ、一日、十五、萬人、の、こ、こ、集、ふ、  
 といふ、と、思、ひ、ぬ

〇前頁に述べた四枚の写真を、記念の念で、思ひ、  
 一、に、あ、つ、た、り、ま、き、一、か、云、関、前、元、山、  
 秋、心、人、物、と、一、人、を、除、く、お、ま、家、族、  
 行、の、後、心、あ、つ、た、り、ま、き、白、く、  
 女、と、い、ふ、人、を、松、と、入、口、  
 か、あ、つ、た、り、ま、き、山、路、の、  
 此、言、を、い、ふ、あ、つ、た、り、ま、き、  
 災、後、の、夜、  
 山、路、の、  
 といふ

加つたのを母も家の娘や若い男共も悔お加新しとて  
 更うせ此のかつて世の奥を悪き(船)の(時)の(家)の(前)に  
 集つて来た(何)の(者)の(十)の(者)の(も)の(と)の(て)の(者)の(七)の(日)の(加)の(つ)の(ま)の  
 (船)の(前)の(念)の(し)の(見)の(る)の(撮)の(影)の(し)の(銀)の(り)の(の)の(興)の(に)の(十)の(種)の(の)の(念)の  
 言ふのあり

○その都府復興といふものが、初めはさうさうの意氣が復興院總裁  
 もも飽まむ理想の都市を造るが意氣もやのに於てか、其後、臨  
 んだ進之姑息の案に當つて、タイレム博改定七出来當るが  
 である此の復興に就き思ひ起すもの西洋七或代七うけを家を築  
 造する留懐の事あること、創へ初代九才一階を建て二代九  
 二階を築き三代九三階を築くと、五塩板に改り急うす力に  
 應じて堅固のよきを心とすものか、そのことと良い構想のなうが

の復興もさうさうの教訓もあるが、日本人と其の  
 兵多に其の怖れを感ずる氣味がある、その以ては粗略な流  
 り、表を張るごん急び堅牢と云ふもの外観の美を他  
 表不き一朝天災の七比ると一日に澤りたるものか、其の大  
 災害の後より其の物も枯乏し其の物も昂騰し、其の復を  
 上つて来ることも至るある、その拘り一概に其の十全の復を  
 急ぎ多くの資を投して粗製急造の家を再ひ造ることを思ふの  
 りある、ハウツウ住居の心持を持續して其の美あるを事の進  
 り、其の住宅を堅く之に経年し進る増設のプランを建て一  
 代のかき出来のだけのこととあり、その故に其の存するものに  
 利巧の計謀むらあるものか、今後震火に遇くは家を修る  
 ことと或代七うけてと其の氣長法の無けん公さうとあり

都市復興の真諦をこころ存すると自今固く信ずる(十月十七日)  
○前述のことごときを必し新し西洋の廠をとりあひて、田舎の  
豪家をも、この世に於て習慣ある、唯れ在るのとき、都府  
を火災の頻る所である、永久の建ち築を駄目とし、系  
及路況を、これらに言及し、しるべき、地震を防禦  
するの徑を、中心として建築を考へ、事態を、つとま  
るべき、加倫都市全体と、系、ことと、定地、行、い、う、い、も  
知、ぬ、杞、憂、の、地、區、を、畫、し、る、の、範圍、丈、行、ふ、と、も、よ  
い、の、ち、あ、る、

○今朝の震災に取らる、つ、ぬ、い、ろ、く、の、物、を、失、は、れ、た、所、也  
名物の無く、つ、ぬ、い、ろ、く、の、物、を、失、は、れ、た、所、也、今、も、ま、ん、を、一、と、い  
ふ、由、も、あ、る、ま、い、今、を、回、顧、の、時、も、ま、い、進、む、日、の、経、つ、る、震、前

の事と回顧、必し今、氣、の、つ、ぬ、い、ろ、く、の、物、を、失、は、れ、た、所、也、何、ん、か、無  
く、ま、い、今、を、回、顧、の、時、も、ま、い、進、む、日、の、経、つ、る、震、前  
あり、悔、し、く、思、ふ、い、ろ、く、の、物、を、失、は、れ、た、所、也、湯、島、聖、地、の、大、改、修、ニ、エ、ウ、ウ、書、淺  
谷、の、門、然、向、修、じ、ん、分、地、の、休、止、の、善、國、本、所、長、兼、を、  
築、地、水、文、社、の、白、河、出、発、の、浴、恩、園、カ、石、川、砲、兵、二、廠、の  
後、出、つ、て、此、等、の、い、ろ、く、の、物、を、失、は、れ、た、所、也、或、は、全、滅、の、あ、る、所、也、  
大、甚、度、の、悔、し、利、産、回、後、し、難、い、と、も、う、い、え、

○今朝の震災に、教訓を、ま、い、今、を、回、顧、の、時、も、ま、い、進、む、日、の、経、つ、る、震、前  
馬、車、を、や、つ、て、ぬ、い、ろ、く、の、物、を、失、は、れ、た、所、也、板、の、倒、り、あ、り、又、は、此、地、を、  
此、等、の、災、難、を、蒙、る、と、も、あ、り、い、ろ、く、の、物、を、失、は、れ、た、所、也、折、角、集、ま、る、所、に、  
救、護、者、も、立、腹、の、事、を、ま、い、今、を、回、顧、の、時、も、ま、い、進、む、日、の、経、つ、る、震、前  
物、を、失、は、れ、た、所、也、皇、宮、の、ま、い、今、を、回、顧、の、時、も、ま、い、進、む、日、の、経、つ、る、震、前

# 帝都焼失區域の復興基礎大綱決定

## 昨日の復興院幹部會 經費十億五ヶ年繼續案

復興院は十九日午後四時より幹部會を開き、復興區域の復興基礎大綱決定案、復興經費十億五ヶ年繼續案を決定した。復興基礎大綱は、帝都焼失區域の復興を、交通、公園、住宅、電力、水道、下水道、防空、防衛、教育、文化、衛生、労働、福利、社会、福祉、その他を包括的に復興することとし、復興經費は十億五ヶ年繼續案を決定した。

復興院は十九日午後四時より幹部會を開き、復興區域の復興基礎大綱決定案、復興經費十億五ヶ年繼續案を決定した。復興基礎大綱は、帝都焼失區域の復興を、交通、公園、住宅、電力、水道、下水道、防空、防衛、教育、文化、衛生、労働、福利、社会、福祉、その他を包括的に復興することとし、復興經費は十億五ヶ年繼續案を決定した。

### 幹線道路

復興院は、帝都焼失區域の復興を、交通、公園、住宅、電力、水道、下水道、防空、防衛、教育、文化、衛生、労働、福利、社会、福祉、その他を包括的に復興することとし、復興經費は十億五ヶ年繼續案を決定した。

### 交通系統

復興院は、帝都焼失區域の復興を、交通、公園、住宅、電力、水道、下水道、防空、防衛、教育、文化、衛生、労働、福利、社会、福祉、その他を包括的に復興することとし、復興經費は十億五ヶ年繼續案を決定した。

### 中央市場

復興院は、帝都焼失區域の復興を、交通、公園、住宅、電力、水道、下水道、防空、防衛、教育、文化、衛生、労働、福利、社会、福祉、その他を包括的に復興することとし、復興經費は十億五ヶ年繼續案を決定した。

### 公園廣場

復興院は、帝都焼失區域の復興を、交通、公園、住宅、電力、水道、下水道、防空、防衛、教育、文化、衛生、労働、福利、社会、福祉、その他を包括的に復興することとし、復興經費は十億五ヶ年繼續案を決定した。

### 基礎大綱の審議順序

復興院は、帝都焼失區域の復興を、交通、公園、住宅、電力、水道、下水道、防空、防衛、教育、文化、衛生、労働、福利、社会、福祉、その他を包括的に復興することとし、復興經費は十億五ヶ年繼續案を決定した。

### 鎌倉史蹟大方潰滅す

▲鎌倉では到處に地割れがあつて、倒れた家よりも、建つて居る家の方が非常に少いので、何れその家が倒れなかつたかと、却て夫れが不審に思はれる位の激震で、従つて宮寺國寶の損害は多大であつた。

▲八幡宮は國寶の大鳥居が折れて仕舞つて、あの銘だけが辛うじて保存が出来ること云ふ状態である。石段下の舞殿と上の樓門が倒れて居る。又大臣山が崩れて廻廊の北と東を大にいためて居るが、中の陳列品は保存されて居る。若宮八幡宮は無事であつた。

▲大佛、昔の大海嘯に堂は壊れても、その姿勢をくづさず居たが、今度の地震では、前が一尺許り陥り、像も一尺五寸程前へいざつたから、少し俯目になつた。石段も大分壊れた。

▲壽福寺、五山の一で、政子や實朝の墓のある寺であるが

墓道は上より山の石が崩れ落ちて容易に上る事が出来ない。政子の墓は完全であるが、實朝の墓は倒壊して居る。本堂は中部丈だけ立つて居るが、四方は倒れ、仁王も一體は倒れ一體はその破壊した口より傾いた所が見えて居た。本尊は無事。

▲建長寺は山門丈は幾分形をとめて居るが、外は全部滅茶々に押し倒されて二階建の堅牢なる庫裡も、昨年出来た本堂も、見る影も無くこはれて仕舞つて、佛像、國寶悉く烏有に歸した。

▲圓覺寺、亦同様こはれて仕舞つて、鎌倉時代唯一の建築物たる舍利殿も同じ運命にあふた。之はどうかして其の面影を偲ばれるやうに再建せんとしても中々困難であらうと専門家が云うて居た。

▲極樂寺の如き國寶が澤山あつたが、寺の全潰した爲めに其の下となつて、佛像を始め悉く粉碎して仕舞つた。

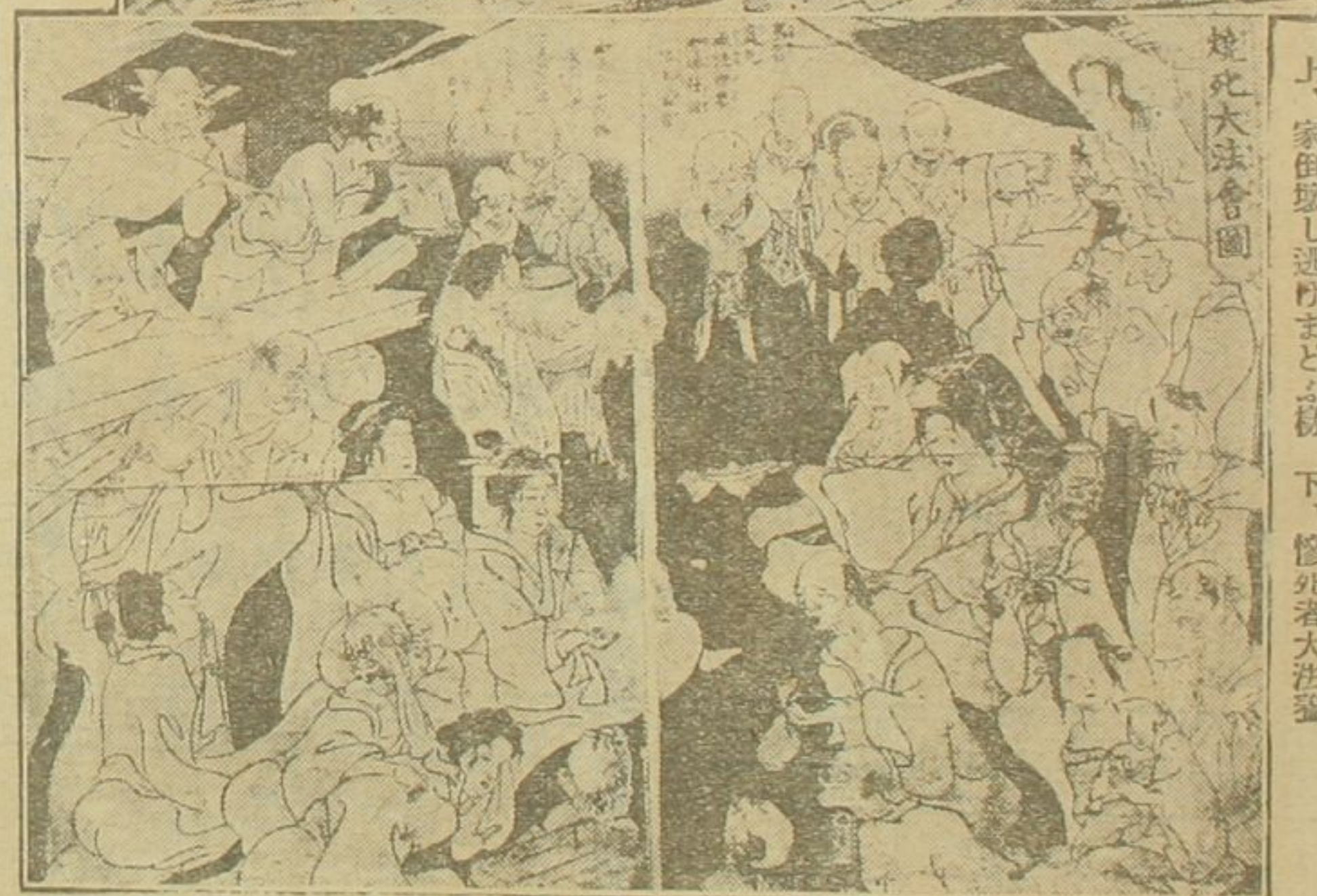
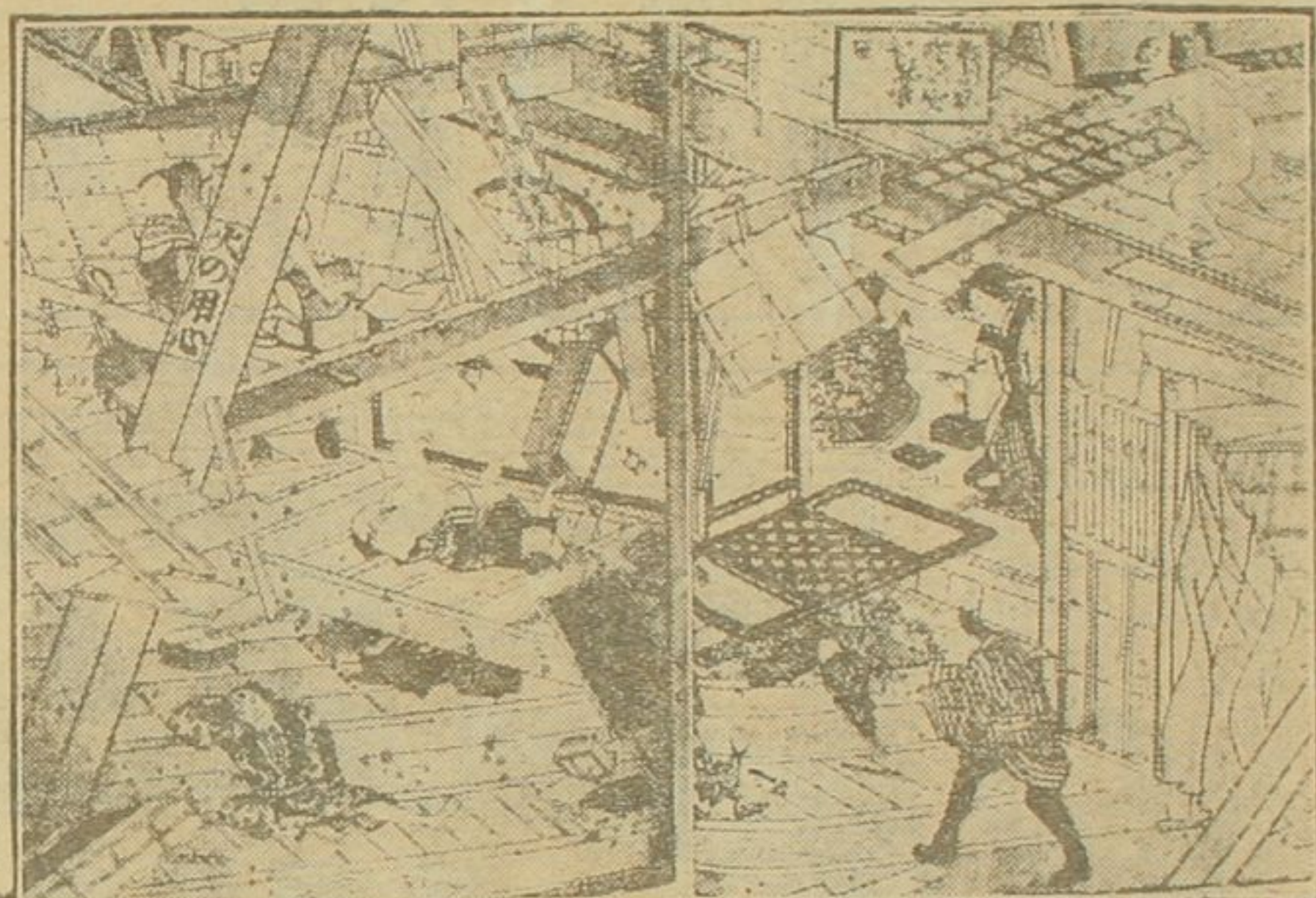
▲光明寺の寶物は幸ひにして長持へ入れてあつたから、此等のものは保存されて居る。現在に色々のものがあるから雨の害を防げば、此處丈は助かると云はれて居る。

▲長谷観音も大損害であるが、本堂丈は倒れなかつたから、其の中にあつた佛體は保存されて居る。要するに鎌倉文明の史蹟保存物は今度の地震で殆ど根本的に破壊されて當時のものとして残るものは、寺内の柏樹位のものとなつて仕舞つたやうな氣がする。



◇ 震地大の間年政安昔は今 ◇

米國から



上、家倒壊し逃げまどふ様 下、惨死者大法葬

の今世は初もを寄せし来に唐詩の詠歌を前も終し  
 ぬか、又と教首多の心母も来に

偶来杉樹の宮松石頭眠山中無曆日寒冬不  
 知年

松が根の心石を枕に山さかの月も一とみ  
 と斗の空にうつ

潮落江平未有風輕舢共濟典君同時々  
 引欲望天未何憂古山是 柳中

潮の引れわたりゆくてのせとあをらの  
 いつれの又松を今よりかこえるむ

返照入閣巷百憂未誰共語古道少人行秋風  
 動朱未奈

夕暮のうら葉をひるくし風あく浪を  
七ひしかりけり

宿昔青雲志 蹉跎白髮年 誰知鏡裏  
形影自相憐

あをくちの心しるひてしるあみのみたりしよかこ  
吾をみよむる

杉下洞童子言河採茶去只在此山中 雲深  
不知處

わけ入るも海未けるともうら山の君に袂に  
雲満つらむか

水田歌 鐘也古橋車馬聲 彭城関を柳偏似  
不勝春

橋をくおに比ひよふ歌都の柳をまよふ  
たかどの春

荊卿一去不復返 易水東流無見時 蒼海蒲條  
薊城北 黃河白草任風吹

易水入る日は死し立ち枯れそよちき草の  
ゆるみむら

兵火有餘燼 多村絶 數家無人 半燒酒殘  
月下寒沙

燒けのころ村を烟りてあつきのわと 悲しく  
月かこもきぬ

山彼長麻に 間雲朝夕集 空度復何有 為  
日照 芳若



十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十  
二十一  
二十二  
二十三  
二十四  
二十五  
二十六  
二十七  
二十八  
二十九  
三十  
三十一  
三十二  
三十三  
三十四  
三十五  
三十六  
三十七  
三十八  
三十九  
四十  
四十一  
四十二  
四十三  
四十四  
四十五  
四十六  
四十七  
四十八  
四十九  
五十  
五十一  
五十二  
五十三  
五十四  
五十五  
五十六  
五十七  
五十八  
五十九  
六十  
六十一  
六十二  
六十三  
六十四  
六十五  
六十六  
六十七  
六十八  
六十九  
七十  
七十一  
七十二  
七十三  
七十四  
七十五  
七十六  
七十七  
七十八  
七十九  
八十  
八十一  
八十二  
八十三  
八十四  
八十五  
八十六  
八十七  
八十八  
八十九  
九十  
九十一  
九十二  
九十三  
九十四  
九十五  
九十六  
九十七  
九十八  
九十九  
一百

○震災後文の協會美品の運動も後都府各府各  
を以ての出来を以て、多分、講演者を含む、本月三十日  
吾洞連續講演を行ふ、再行講演奉仕の一端也

復興問題講習會趣旨

振古未曾有の大震災火災に依つて、帝都を中心とした關東全般に亙る文化の大半は、一たまりもなく消滅一掃されて了ひました。痛恨哀感全く言語に絶した大慘事です。しかしこの期に際し、未だ餘熱のさめぬ間、餘震の絶えぬ間から早くも復興氣運が焦土の上に漲り溢れたといふことは、實に日本國民の喜びであり賜でなくてはなりません。更に政府では復興院の一省をすら設けて、この大事業の貫徹を遺憾なからしめようとしてゐることは、改めて申上げるまでもありません。けれども復興の問題たるや、決して單に復興院や災害地の罹災者のみに係る問題でなく、日本全國民の等しく關心してその解決を急がねばならぬ重大問題であると思ひます。舊文化の復興、進んでは新文化の建設は一に日本國民全體の双肩にかゝつてゐる大問題といはなくてはなりません。而かも復興といひ、建設といひ、其處には幾多の複雑紛糾した問題があつて、深い研究と考察とを必要といたします。本會はこゝに鑑るところがあつて、微力ながら、この方面に資する所あらんことを期して、復興問題講習會を開催し、當面緊急の問題を、それ〴〵専門知名の學者にお願ひして、研究批判していただくことに致しました。必ずや多くの暗示と教訓とを與へてくれることゝ信じます。振つて新文化建設の理想の光に浴されんことを希望いたします。

- 一、今回事之趣旨により左の通り復興問題講習會を開催することゝいたしました。男女を問はず一般の人々の聴講を歓迎致します。
  - 一、會場 牛込早稻田穴八幡側「早稻田大學第一高等學院」
  - 一、聴講料 一日分四十錢 五日間前納一圓五十錢
  - 一、申込所 東京牛込區早稻田町三四大日本文明協會事務所
- 便宜上聴講申込は各所書店で扱ひます。尙ほ當日會場入口に於ても取扱ひます。

課目	講師	時間
復興問題に就て	法學博士 浮田和民氏	一時——二時
今後の地震の爲めに	理學博士 今村明恆氏	二時——四時
主として建築物より	工學博士 佐藤功一氏	二時——三時半
見たる帝都復興	工學博士 佐藤功一氏	二時——三時半
震災と文藝との交渉	早大教授 片上 伸氏	三時半——五時
主として建築物より	工學博士 佐藤功一氏	二時——三時半
見たる帝都復興	工學博士 佐藤功一氏	二時——三時半
帝都復興の精神的面	文學博士 三宅雪嶺氏	三時半——五時
復興と經濟的考察	法學博士 鹽澤昌貞氏	二時——三時半
都市計畫の經濟的基礎	法學博士 鹽澤昌貞氏	二時——三時半
復興と經濟的考察	法學博士 鹽澤昌貞氏	三時半——五時
法律思想に於ける復興問題	法學博士 鹽澤昌貞氏	一時——二時
復興問題	法學博士 牧野英一氏	二時——四時

十二年十月 主催 大日本文明協會

○感日之催之而有一言、三氣之傷、神樂江卷石、其為七、  
 年前、皆之、其言、皆、有、軒、論、畫、畫、之、一、性、也、返、(す、余、既、  
 此、者、を、傳、り、し、る、こ、と、を、忘、れ、架、中、別、二、性、を、有、す、此、を、名、  
 今、之、他、の、回、也、と、也、大、隈、分、館、之、所、於、元、之、り、則、ち、座、  
 左、之、り、也、) 則、之、乘、し、り、勢、の、り、也、此、也、と、お、新、し、い、性、を、今、  
 之、り、也、) 乃、ち、折、也、也、無、脚、を、懸、す、十月、廿、日、手、記、

○即、河、陽、云、遠、山、無、鎖、遠、水、無、波、遠、人、無、目、余、亦、云、遠、山、  
 有、平、無、曲、遠、水、有、去、無、來、遠、人、宜、孤、不、宜、侶、

○先、察、君、臣、呼、應、之、位、或、山、為、君、而、樹、轉、或、樹、為、君、而、出、林、  
 然、後、奏、心、臣、傳、墨、若、用、朽、炭、躊、躇、更、易、神、髓、氣、素、愈、  
 想、念、方、

○山、往、春、如、愛、於、夏、如、競、於、秋、如、處、於、冬、如、定、

○華、典、墨、最、難、相、畫、具、境、而、皴、之、清、濁、在、筆、有、皴、而、  
 勢、之、隱、現、在、墨、

○自、然、非、工、不、若、用、古、用、古、非、解、不、若、無、題、題、其、画、百、五、  
 為、注、脚、此、中、不、失、矣、嘗、千、里、

○古、多、有、不、用、甚、者、恐、覆、山、脉、之、巧、障、皴、法、之、妙、今、人、畫、不、  
 以、觀、又、須、畫、點、不、免、唾、也、添、疵、之、謂、

○余、每、畫、雪、烟、着、底、危、峰、尖、出、一、人、綴、之、有、振、衣、平、似、勢、  
 空、新、之、余、曰、此、以、絕、頂、為、主、若、兒、孫、諸、岫、可、以、不、呈、若、脚、柯、  
 根、可、以、不、露、令、人、得、之、精、筆、之、外、客、曰、古、人、寫、梅、別、竹、作、  
 過、牆、一、枝、離、奇、具、勢、若、用、全、幹、皴、枝、套、套、而、無、味、亦、  
 此、意、乎、余、曰、然、以上、明、沈、默、洞、曜、畫、塵、

○林、樹、最、不、可、少、特、于、茂、林、中、間、見、乃、奇、古、茂、森、惟、松、栢、楊、

柳椿槐要鬱森其如要在樹頭與四面參差一出入一肥一瘦處古人以木炭畫圈隨圈而點入之心為此也

○葦北苑畫樹多有不作小樹者如秋山行旅是也又有作小樹但只遠望之似樹其實憑點綴以成形者余謂此即米氏後落茄之源委蓋小樹最要淋漓約略簡于枝柯而繁形影欲如文君之眉與黛色相參合則是高手也

○畫樹之戲只在多曲雖一技一節無可直者其面皆俯仰全于曲中取之或曰然則法家不有直樹乎曰樹雖直而生枝發節處必不多直也葦北苑樹作鈎挺之狀特曲處簡耳李晉丘則千屈萬曲無復直筆矣

十二  
是龍廷韓

畫說

○山頭要折搭轉換山脈皆順此活法也衆峯如相揖遜萬樹相從如大將欽平森然有不可犯之色此言真山之形也

○山中唯水口最難畫

○遠水無灣遠人無目

○山坡中可以置屋舍水中可置小艇從此有生氣山腰用雲氣見得山勢高不可測

○或畫山水一幅先立題目然後著筆若無題目便不成畫更要記春夏秋冬景色春則萬物發生夏則樹木葱茏秋則萬象蕭殺冬則煙雲黯淡天色模糊能畫此者為上矣

以上黃大庵山水訣

○山大物也。其形欲怪可拔，欲偃蹇，欲軒豁，欲箕踞，欲盤礴，欲渾厚，欲雄豪，欲精神，欲莊重，欲顧盼，欲朝揖，欲上有蓋，欲下有乘，欲前有援，欲後有倚，欲下瞰，而若臨視，欲下游，而若指麾，此山之大體也。

○水活物也。其形欲深靜，欲柔滑，欲汪洋，欲回環，欲肥臆，欲噴薄，欲激射，欲多泉，欲速流，欲瀑布，揮天，欲灑撲入地，欲漁釣怡，欲草木欣，欲挾烟雲，而秀媚，欲照溪谷，而光輝，此水之活體也。

○山欲秀，畫去之，則不秀，烟霞鎖其胸，則不秀，水欲遠，畫去之，則不遠，掩映斷其流，則不秀，蓋山畫去，不唯無秀，拔之，亦何異畫，雖吐水，畫去，不唯無盤折之遠，且何異畫蚯蚓。

○山面溪山，林木盤折委曲，鋪設其景，而來不厭其詳，所以足人目之近，尋子也。信息平遠，峰嶺重疊，鉤連縹緲，而志不厭其遠，所以極人目之曠也。遠山無皴，遠水無波，遠人無目，非無也，如無耳。

○世之為論，謂山有可行者，有可居者，有可游者，有可居者，畫凡至此，皆入妙品，但可行可居，不知可居可游之處，十為得，何者，觀今山川，地占數百里，可游可居之處，十無三四，而必取可居可游之品，君子之所以渴慕林泉者，正謂此在處故也。故畫者，而以此意造，而鑿者，又而以此意窮之，此謂不失其本意。

○山有戴土，山有戴石，土山戴石，林木瘦促，石山戴土，林木肥茂，木存在山，木存在水，在山者，土厚之處，有千尺之松，在

水者土萬之趣有數尺之葉

○ 店舍依溪不依水衝依溪以近水不依水衝以為害或有依水衝者水雖衝之必無水害也村舍依陸不依山依陸以便耕不依山以為耕遠或有依山者山之側必有可耕處也

○ 大松大石不畫於大岸大坡之上不可作淺灘平流之景

○ 山與烟雲如春無春景

○ 畫畫花者以梅花至深坑中臨其上而瞰之則花之四面得矣  
○ 畫畫水者取一技水因月影照其影于素壁之上則竹之真形出矣  
○ 畫山水者何以異也蓋身即山水而取之則山水之意度見矣  
○ 真山水之川谷遠望之以取其勢近看之以取其質  
○ 真山水之雲氣四時不同春融怡夏蔚鬱秋疎薄冬黯淡  
○ 畫畫見其大象而不為斬刻之形則雲氣之態度活矣

真山水之烟嵐四時不同春山澹冶而如笑夏山蒼翠而如滴秋山明淨而如練冬山慘淡而如睡畫畫見其大意而不為刻畫之迹則烟嵐之景象正矣真山水之風雨遠望可得而近者玩習不能究錯綜起止之勢真山水之陰晴遠望可老而近者拘狹不能得明晦隱見之迹山之人物以標道路山之樓觀以標勝槩山之林木映蔽以分遠近山之溪谷斷續以分淺深水之津渡橋梁以序人事水之漁艇釣竿以序人意大山中必有眾山之主所以分布以次固岸林壑為遠近大小之宗主也其象若大君赫於當陽而百辟奔走朝會無偃蹇皆却之勢也長松亭為眾木之表所以分布以次藤蘿草木為振印于俯仰之師帥也其勢若君子軒然得時而眾小人為之役使無憑凌愁挫之態也山近看如此遠觀

軍看又如也、遠十數里看又如也、每遠每異、所謂山形常移也、  
山正而如也、側面又如也、背面又如也、每看每異、所謂山形面  
看也、如也、是一山而呈數十百山之形狀、可得不是乎、山春夏  
看如此、秋冬看又如也、所謂四時之景不同也、山朝看如此、暮  
看又如此、陰晴看又如此、所謂朝暮之變態不同也、如也、是一  
山而數十百山之意態、可得不是乎、春山烟雲連綿、人欣  
夏山嘉木繁陰、人坦、秋山明淨、搖蕩、人雨、冬山昏霾、  
醫塞、人寂、看此畫、令人生此意、如真在此山中、此畫之氣  
外意也、見青烟白道而思行、見平川茂照而思望、見幽人  
山客而思居、見岩窟泉石而思坐、看此畫、令人起此心、如  
將真即其處、此畫之意外妙也 宋郭熙 林泉高隱  
〇夫水者有緩急淺深、此為大體也、有山上水、曰湍、曰瀉、  
謂其文滋緩、山澗間有水、曰澗、曰湍、  
而軟石者、謂之瀉泉、若在澗、有水澤、亮而仰湍者、謂之噴  
泉、言瀑泉者、巖崖峻壁之間、一石飛出如練、千尺分灑  
於萬仞之下、有盤湍怒浪、瀉瀼騰沸、噴濺漂流、雖遠  
置罪、魚鱉皆不能容也、言激湍者、山澗積水、欲流而石  
碍、鏗中猛下、其片浪如滾、有石迎激、方回四折、交  
流四會、用筆輕重、自分淺深、盈滿而散漫也、言淙  
者、衆流攢衝、鳴湍壘瀨、噴如雷風、四面若浪、謂  
之淙也、言沂水者、不用合關、一片注下、其瀑泉  
噴異矣、亦宜分別、夫海水者、風波浩蕩、巨浪捲翻、  
山水中不用也、有雨、空峭壁、不雨、空途、中有流水、  
漂急如箭、舟不停者、跌水可無急於此也、言江湖者

言波山下有水、曰瀉、謂其文滋緩、山澗間有水、曰澗、  
而軟石者、謂之瀉泉、若在澗、有水澤、亮而仰湍者、謂之噴  
泉、言瀑泉者、巖崖峻壁之間、一石飛出如練、千尺分灑  
於萬仞之下、有盤湍怒浪、瀉瀼騰沸、噴濺漂流、雖遠  
置罪、魚鱉皆不能容也、言激湍者、山澗積水、欲流而石  
碍、鏗中猛下、其片浪如滾、有石迎激、方回四折、交  
流四會、用筆輕重、自分淺深、盈滿而散漫也、言淙  
者、衆流攢衝、鳴湍壘瀨、噴如雷風、四面若浪、謂  
之淙也、言沂水者、不用合關、一片注下、其瀑泉  
噴異矣、亦宜分別、夫海水者、風波浩蕩、巨浪捲翻、  
山水中不用也、有雨、空峭壁、不雨、空途、中有流水、  
漂急如箭、舟不停者、跌水可無急於此也、言江湖者

注洞庭之廣大也。言泉源者，水不出流也。其水混，不絕，故孟子所謂源泉混混，不舍晝夜，是也。惟溪，水在山中，多用之。宜高盤曲，掩映斷續，伏而復見，以遠至近，仍宜烟霞鎖鑰，隱者在。王在，至云路欲斷而不斷，水欲流而不流，此之謂歟。夫砥磧者，水心逆流，水流而急，急而有怒，中有灘也。夫砥磧者，岸絕流，水流而急，回環有紋，中有石也。言砥磧者，有山岸而無水也。然水有四時之色，隨四時之氣，春水微碧，夏水微涼，秋水微清，冬水微慘，又有汀洲烟渚，皆水中人可住而景所集也。至漁漁鴈漂之類，畫之者，多樂取以見才詞，况水為山之血脉，故畫水者，宜天高水闊為佳也。宋韓拙純全山水純

ありの山領松屋の記あり、此記に據りて書するの事ありき。十月廿二日記

己酉(寛政元年)冬、余受賜今第、庚戌(二年)秋、徒居焉。……獨免後去、海羽之處、炊爨供具之室、稍有不便者、欲更其地而不果、居數年、乃其家人議、且二人……二人解事、屋梁不動、而互易區、安今之後也。……(西北)……舊有薪廠、撤之、蓋取荆、更制疎竹、數竿、勿忽、得西、領頂有松、拊所謂宗園(四卷上)田氏之祖)松者、園園所瞻仰、余喜出望外、子煙、皆為吾加之。……西嶺之松、遺愛所存、視以為娛、亦所以為敬也。陶靖節志義之士也、其詩曰、冬嶺秀孤松、掃其宇、以名吾屋、時甲子冬十一月也。



此に據つて見れば、書言の位記を西北四五里の地とあり、稍こ  
 悉く得んも、余ら之を知せし倉庫の二階と自ら云ふと  
 同し、さういふ如し、地圖中の一階にある倉庫と新蔵と  
 之を撤して前面に嶺上の河松を築くことを得たりとす  
 八、國中十二品上の室に春の夜、おのゝり、松を由  
 緒あるものゝ事、こと此に又も、おのゝり、松を由  
 二、添加を要す

○撤後、高橋義彦を故吉田在任遺著、日本歴史地理之研  
 究一冊を贈り来ふ、これと吉田の諸施設に對する論文早  
 七冊を採録し、そのものを、中、高橋山とて之を發行  
 せし、あると、金子潤、又、あると、高橋山、八月上旬  
 發行せん、と、自ら云ふ、余ら、配本、を、おのゝり、

●校本萬葉集を焼いて喪心した  
 佐々木博士

東京帝大では七十五萬冊の書籍を所蔵してゐるが、今回圖  
 書館の類焼によつて五十四萬冊は祝融氏の見舞ふ所となり、  
 殊に文學部の國語研究室も焼けたので、『校本萬葉集』を失つ  
 たことは學問の大打撃である。十數年間この書の校合に没頭  
 した佐々木信綱博士は、その焼失を聞き一時は餘りの驚きと  
 失望とで腦貧血を起し自宅で卒倒したさうだが、西片町の邸  
 にお訪ねすると、書齋の中に面瘦の姿を見せた博士は語る。  
 『萬葉集は鎌倉時代に仙覺律師の手によつて校合され、爾來  
 約七百年の明治四十五年に、我々は日本文學の精髓ともいふ  
 べき此書を不朽に傳へ、且つ新しい學問の基礎たらしめやう  
 と、文部省の文藝委員會の仕事にし、更に引續き帝大文學部  
 の國語研究室の事業として繼續したものである。それには國  
 學院講師武田祐吉、文學士橋本進吉、久松潜一の三氏と共に  
 着手し整理が出来るや、啓明會の補助を得て愈々出版する事  
 となり、三年前に漸く完成したが、變態の文字多く活版にさ  
 れず、清書し寫真版とした上金屬版印刷を企て、あらゆる苦  
 心を盡して全部出来上つたので、本石町の金子製本所へ廻し  
 たま、焼いて了つた。そのみでなく、十二年の間努力した  
 校合の原本に清書した原稿、金屬原版、寫眞の種板、金屬版

の校正刷等も、皆灰になつたが、幸ひ校正刷り二通りは出版  
 元の博文館から返送されたので、是で脈が繋がるが、原本を  
 失なつたことは返すくも残念である。この本は一冊五千頁  
 の浩漭なもので、僅に五百部しか印刷しない貴重なものであ  
 つた。我國書は安元、應仁、安永、天明の四大火に焼け、そ  
 れに残つた珍籍は今回の火災で失つたので、残存するもの實  
 に少くなつたのは悲みの極みである』と。

●菊池家の秘藏華山の名作  
 『于公高門』圖は無難

大震災の爲めに天下の珍といはる、書畫骨董の焼失したも  
 のは、幾億圓なるか分らぬ夥しい價格である。しかも金高へ  
 の換算の事實上不可能の美術品が澤山ある。  
 關東の藏幅家として知られたる名門菊池家は、その愛藏五  
 百萬圓と呼ばれてゐるが、九月二日下谷竹町の土藏に火が入  
 り、古書畫道具類すべて焰の亂舞に委したが、當主は猛火の  
 中に飛込んで天下の愛好家の垂涎措かざる華山一代の名作  
 『于公高門』の圖と昨年顔世清氏が將來した、蘇東坡の書卷  
 と外一點だけ身を以て運び出したのは、斯界の爲めに喜ぶべ  
 きことである。この『于公高門』の圖は華山が幕府の忌諱に  
 觸れて召捕となり、揚り屋に上つた時、某判官(一寸名を忘  
 れる)の賢明なる裁きによつて助命され、歸藩して幽閉の身と

なつた。華山は非常に之を徳とし、支那の名判官于公の古事になぞらへて、この『于公高門』の圖を畫いて某判官に贈つた。つまり華山が謹慎中齋戒沐浴して生命のあらん限りを盡して畫いたものであるから、華山の遺作中他に比肩を見ない第一の傑作である。これが維新の際、僅々三十五兩で菊池家の有に歸したのだと云ふ。尙この外菊池家では、華山の『岩に猫』の圖があつたが、之は焼いて了つた。又華山の『林和靖』の圖は、小石川の親類に預けて置いたから助かつたさうである。

大雪災起り市山も其厄に傳り此の新刊ハ大部分焼失し唯此幸に高橋義彦方ハ若干部宛迄ありたり火災を免れり

逆美(今日初め)千入る千二百餘頁の大冊なり其内の餘地又他二載せる論文と他ものあり、そのうち著し全部を印刷に附さん此三倍大の冊となりし、紙を七一且人の誤りたるものを、紙を合はせし、玉石を混するを著者の本意もあらず、しと多くハ割愛せしめ此二冊成りたり也

十月廿三日記

### ○災餘雜想

災後為すこと多し、漫り、葉を採つて、雪災の因す所感も録し前巻と此巻と二十枚許りの紙を合はせしが、赤間、乗し、葉を採つて、災餘雜想と書り

大正十二年十月廿四日小橋壺主人

○災後始り聞忍惶の隙、夜敵て園が鮮ハ其他を殺害し此こと、同豆の葉もわらうる谷子と、越種せんは、多数ある、時時、葉の終結し、よるあるか、追て、実が、こころ、つて来ると、まんうらと、事件を、お、目多くある、又夜敵て園、も、性、の、よ、の、七、の、あ、殺せんは、よ、日本人も多く、交つてある、殺せんは、よ、の、四、の、以上も、よ、のこと、う、て、未、比、の、郊、外、の、多、い、と、よ、の、原因を、述、う、ら、ぬ、は、て、部

外に逃れ此のや、やうと整えられたるに連れてみればその  
欠陥を教へた極であること、数う部外に多いか否かを夜  
警団の性質の通り、その夜警を二種に分け、トサリサ  
サリん、探査をやつた破る者、日ざり、いくら、あるのを、  
指すの、又此の悲境の場所を利用し、正義者、いかに  
を、企て、果さる、つ、扱、ある、も、ある、扱、子、り、大、体  
ハ、鮮、人、放、火、の、各、區、の、現、行、犯、を、視、聴、し、一、概、に、警、り、を、  
七、疑、心、暗、史、し、怪、し、け、る、見、守、け、ら、れ、る、を、欠、陥、に、扱、傷  
し、と、その、大、体、の、事、業、と、ある、裁、判、所、や、教、育、家、と、一  
概、に、夜、警、団、の、罪、を、犯、せ、る、と、する、と、没、頭、し、て、ある、か、冷、静、に  
考、へ、る、と、夜、警、団、と、も、切、り、差、断、り、し、て、し、め、ら、れ、ら、し、  
る、に、あ、り、や、と、する、と、鮮、人、の、警、を、先、の、根、拠、に、し、ら、る、と、整、し

視聽はあつて、その、事、業、を、進、ん、だ、宣、傳、を、し、ら、る  
実、か、ある、自、命、の、目、撃、者、に、一、例、に、見、る、と、教、育、家、と、其、の、場  
合、に、停、止、し、ら、る、と、鮮、人、の、刑、を、施、し、ら、る、は、民  
の、為、に、し、せ、し、倍、親、と、す、る、處、に、あ、つ、た、に、は、確、信、は、あ、ら、ず、  
高、度、の、模、倣、を、そ、と、バ、夜、警、を、あ、り、す、と、し、向、き、を、扱、刀、と、  
た、の、こ、う、す、ら、あ、つ、た、に、ま、る、を、教、育、家、に、知、り、つ、一、向、に、制、し、ら、る、つ  
た、こ、も、自、命、の、目、撃、者、に、一、例、に、あ、る、人、心、動、乱、の、際、に、  
中、に、起、り、さ、る、事、業、を、あ、ら、る、と、は、教、育、家、の、意、図、に、あ、ら、ず、し、て、  
却、ち、その、事、業、の、予、計、に、や、疎、い、と、あ、る、と、惶、惑、の、故、に、暴、君、と、出、る  
七、ま、る、無、理、も、ろ、の、譯、に、現、二、三、つ、つ、く、逮捕、を、や、つ、た、  
と、と、その、事、業、の、統、一、を、先、向、き、と、め、ら、る、と、す、ら、る、と、彼  
等、と、暴、君、と、し、て、自、然、に、無、し、一、事、を、教、育、家、の、手、傳、を、や、つ

とは信し、随ひつて懲らざるを憐れみむるも、憐れむるが故に、  
 とうておれとて言へ、言へば譯せしむる後等も、適はらざる  
 康素捕を言ひ、法庭にても笑つて未保の白状をやつてある  
 有様もあることを、増田君の病祝の夜、彼等固の諸君の  
 一端を聞くと、さういふ、恐らく各方面のことも、似て扱ふといひ  
 であらう、一ト口を云へば、此等のゆゑに起つた行末と云ふのおも  
 ち、別して無教な案の場合に突おし、此の出来事であること  
 此等刑を被る人と善悪の殺人犯と同じく視る扱ふこと  
 あり、そのあどあを失する、公平に考へん、未保の流言を放  
 つて人を惑へ、其の源の誰れにあることを、扱ひぬらるゝ  
 此流言を、未保者、此等と案、其の官吏を以て、扱ひぬらるゝ  
 才なる、鮮人の暴卒を未保、りてせうけし、出せぬ、いふ

此等が、さういふ原因のあるのに、司直を、さう方面に、干と、  
 いら、その扱ひある、殊に、朝鮮人の暴卒を、さういふ  
 人の目撃するに、さういふ、國際関係を、さういふ  
 之れを、散らんと、つと、さういふ、扱ふ形勢のあるのを、  
 此等、解る、困ら、鮮人の暴卒である、ことを、散ら、結果の  
 謂へん、さういふ、日本人が、鮮人を、殺し、と、さういふ、疑念を、  
 世界に、出さるゝ、こと、さういふ、國際上、こんな、こと、寧ろ、  
 べき、いふ、ある、さういふ、今、未保捕を、言ひ、た、或る、もの、  
 へ、愈々、殺人罪を、以つて、論せ、さういふ、こと、さういふ、彼等と、  
 七、罪、さういふ、相狂、さういふ、後、おら、さういふ、散ら、ある、ことを、  
 力、説く、さういふ、現に、彼等も、さういふ、未保捕を、言ひ、た、  
 べき、漸やく、真劍に、さういふ、前日の、白状を、志さ、さういふ、  
 勢、さういふ、

あまのまが左もあまのまきむあまのまかゆ多件しをもま宗と甘粕  
大尉一がひり冠る物うびあつたくい加と車馬うま  
出来てあまの輿論がやうましくあんなが此島教唆者か  
上官のあることらむさげ出さるるであらう、夜数なる件も  
莫し読むれば下手人より教唆者の方の罪があるのだ  
○切中悲慘の災禍に罹つたことを石濱敏一氏がある、一四  
日訪ひ来たの話しを聞けば、石濱も石川其河に近江家を  
後しは為る格別の被害も無つたことであらう、石川の或る資産  
家に婿に長女と其の子供と共に無惨の死を遂げたと云ふ  
深川の火事火を起けるは一家十数人船を働いて川の  
のり川に逃げた、其の川の二方を流るる船もある、マサカ  
まの船も火事火事と思ふが、まことを安地地帯と思つて

みる内橋火を起しひまつて見る、西側の舟を焼ける  
橋もあつたると云ふ、船頭もつらつら逃げ去つて  
大川へ出ることも出来ず、家族も船頭の船も銘々陸に  
這い上つたが、火事の猛烈のせよ、あんなの火を起した  
ら枯んて思ひ、尺の百もあるものうんく、若くも幸せし  
皆ら思ひくの行動を取つたのむ、この一家族も離れ  
く離れなううと、長女と小兒一人を捕死し、生んで一才  
の子をいぬ抱えて逃げたが、この小兒も三葉でこれく  
く、小女の屍体も橋をこぎ、父と母をか小兒の屍体を  
遂に父兄さんずと云ふ、主人も大火傷を受けたが幸と  
いふので、和島橋を流し、橋をこぎ、火傷のあま  
涙の肺炎を起して、まのあまのあまのあまのあまのあま

あることあると云ふところ、石海を引取りの出入り家のつれま  
 りるる乗船もさうく、千七百、あるを証をヤマト引取りのつれま  
 七三三時の控帳をヤマトを証する為の事ある事体は漸や  
 く四後に向られ今の日迄人の七長世の事と口より出れば、  
 事あるれば此の事の前親と幸なりと云ふ二を証を助うつにこ  
 とらあせむとら、さる舟を去つて附近の舟に全身を投  
 じ、武人と頭をかき、後し時と呼吸の為の頭を水上に  
 七時名の長きるるお守りありと為り、四人共助うつに、  
 なる眼より朦朧と見ゆ、助つにありと音入の返りあきり、  
 りの味を吐き出し、と云ふ、十一歳の孫の母生れとあること  
 らが、多合死んがこと、思つてありし、こらうも、儀に助うつに、  
 の年七世父母や父母と云ふとある、川より葦の葉を生して、

本に隠んてみれば、さるる●や学校の體操の教ゆが、  
 七ある見し、あると云ふこと、此の親族の思ひ、一面の経を、  
 轉りあること、切んて、此の時と、さるるの情、  
 さるるつに、と云ふ、コンナ書言を、本所、  
 ある譯して、海外、  
 自ら直接、  
 ○日本大さか、  
 七連采中、  
 とも、  
 言の連采を、  
 女つ、  
 たりと、

ある光景であつたといふ、日露の紛争と此の半出米の  
運物を身を買つたといふ事と一七年の二層入つたが、こ  
れは大火に焼く中、長き道の人の手を越して焼きたる出米  
つたといふ事といふも石炭の積也

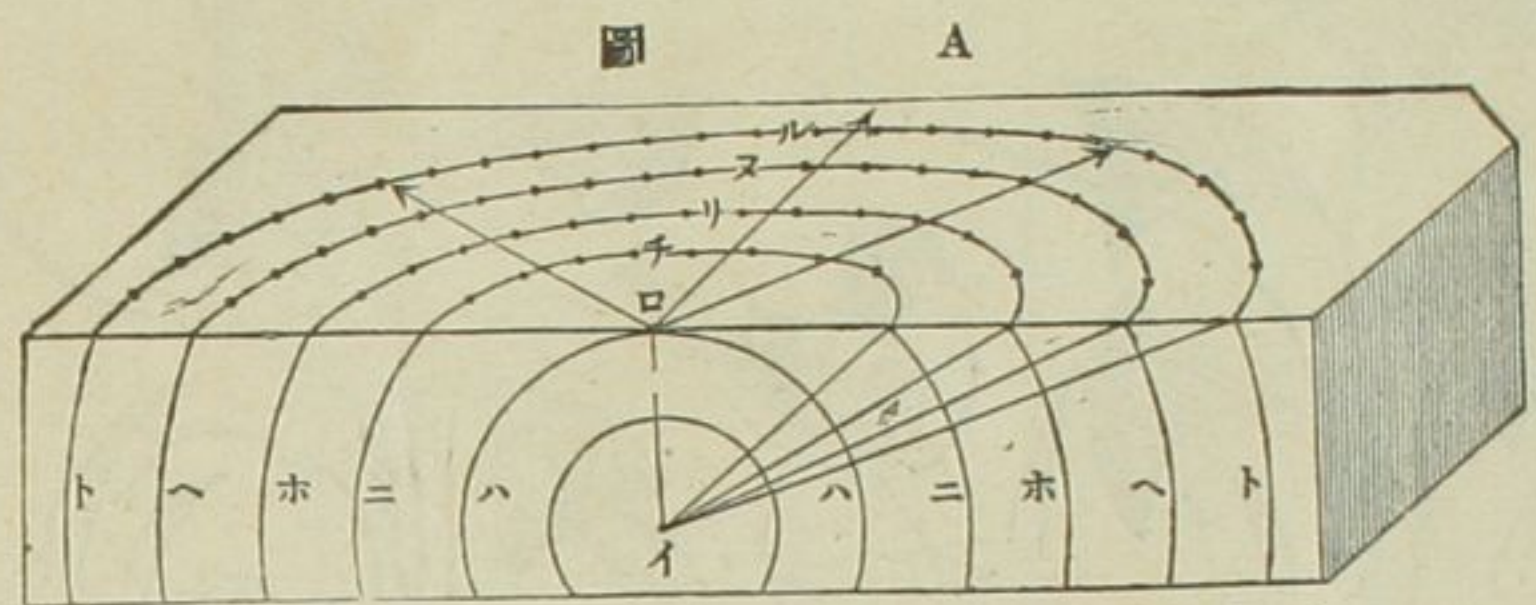
○此後の横濱をみると、その後に市中の橋とといふも、こゝに  
地上よりハ、隆起するところをみるといふ、是丈地面が低下し  
たのがあるといふ切なる。

○コンナ事とあるは、是れもよく出放部から近所の後、  
を郵送して来たといふ、是れも横濱の又、その自由地、  
内の地震、不測なる部分が振動せんが、地震毎分の  
ぬけの今、是れも、説く、一、二、三、後、且つ、  
を考きぬき、必書の圖をこゝに、貼付する、こととした

地震と静止の時の、常は動いてゐる、七の比が、計  
器の無い時代、大地と動く、(地震の、  
の、信せられて、近來、大地と動く、  
こと、と、つて、来た、一、二、三、  
物、を、着、る、之、を、弾、波、と、稱、して、  
動、と、海、波、の、振、状、的、軌、道、を、取、る、  
一、二、三、一、二、三、波、の、進、行、方、向、を、  
へ、ん、(一、二、三)之、れ、無、直、の、ま、  
ん、て、あ、る、二、三、種、の、内、縦、波、ハ、  
もの、固、体、液、体、気、体、等、何、れ、の、  
あるが、横波と形の、  
り、起、る、といふ、この、縦、波、を、一、二、三、

ふらふら、善き上下動、水平動といふて、二枚あるがけ

も、その、固體物質中のみ起り得るものなり



らロ源震(ト至乃ロ)源震面地(ロ)源震(イ) 播傳の震地  
波震た出らカ源震面地(ニ至乃チ)波震た出

縦波は一名  
正波又は凝集波  
よはれ、横波  
は一名曲波  
よはれと居る。  
震波の起原す  
る地の底の點は  
之を震源と稱し  
て、其の直上に  
ある地面の一點  
を地面震源と稱  
する。して震波  
は震源から、四  
方に幅狀に傳播  
するものである

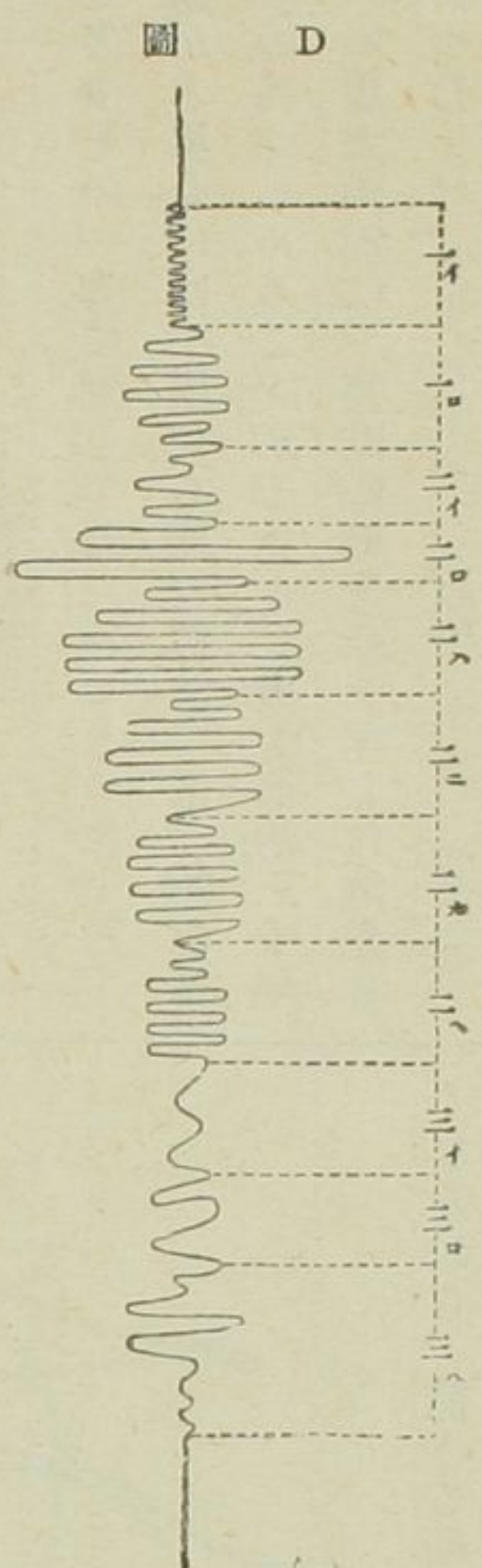
から、其の最も早く達する地面の點は地面震源  
で、それから順次他の點にも波及すること、A  
圖に示す通りである。是故に地面震源に向ふ震  
波は、地面に垂直の路を取り、其の地面震源以  
外の點に向ふ震波は地面に對しては斜の路を取  
ることになる。而も其の斜の度は、地面震源を  
距れば距るだけ、それだけ、大きくなる。此の  
事實からして、震波の出射角といふものを區別  
する。出射角は、地面震源では九十度であるが、  
此の點を距れば距るだけ、それだけ小さくなる。  
其の結果震波は、地面震源では、下から突き揚  
げて来るやうに感じられて、之を距る遠方の所  
では、横から来るやうに感じられる。従來上下  
動と水平動(波動)とを區別して、之を異質の地  
震の如くに思ふたのは、多くは誤見で、その實  
大抵出射角の大小による區別であつたことが分

いはん、さう感ずるのれとさう感ずるのれと其の解  
説又由つてあることに出来る

上下動、水平動の外、回転動と云ふものもあるが、  
これらも、石塔のこぼれが、地震の起るる方向を  
今も度々ある、今も横波の震源、震源、井田直  
湖の銅像を今も、震源、其位地を皆、これらも、  
の一例、あるが、これら、地震、自らの回転運動を、  
況んは、さう、回転、此物の重力の中心が、その中心  
である、さう、一方、偏して、その、斯かる、  
合、さう、指さす、来る、震波、此物、を、多、少、  
得る、もの、である、さう、落、地、震、を、地盤、の、  
複雑な運動をする、その、當つて、その、状、を、  
復、旋、る、運、動、を、する、その、當つて、その、状、を、  
復、旋、る、運、動、を、する、その、當つて、その、状、を、



もあるが、螺旋の太乱れなるときは形を呈してゐる  
 従来の経験に據るに、地面震源から甚く遠い地震を最初と  
 して、小さく弱く、その後、大きく強く、最後、又弱く、さうして  
 まう三相の成り立つてゐる。



震後(三)震主(二)震前(一)

の第四から第六ま  
 での部分は、幅の  
 次第に狭くなり行  
 くものである。終  
 りに、後震にも、通  
 例一部から三部ま

わけである。之を前震(一名前相)主震(主相)後  
 震(後相)と稱して、其の各震は又D圖に示す通  
 りに、數部から成立つて居る。即ち、前震は主  
 として狭幅短週期の波から成り立つて居るが、  
 しかし又二部に別れて、後部の波は前部のもの  
 より比較的幅廣く、又時に週期も長い。次ぎの  
 主震は最大幅最長週期の波から成り立つて、六  
 部に細別され、第一部の波は數少なく且遅く、  
 第二部のものゝ矢張遅いが、週期は稍早く、第  
 三部のものは急激で週期は甚だ短く、是から後

での區別がある。

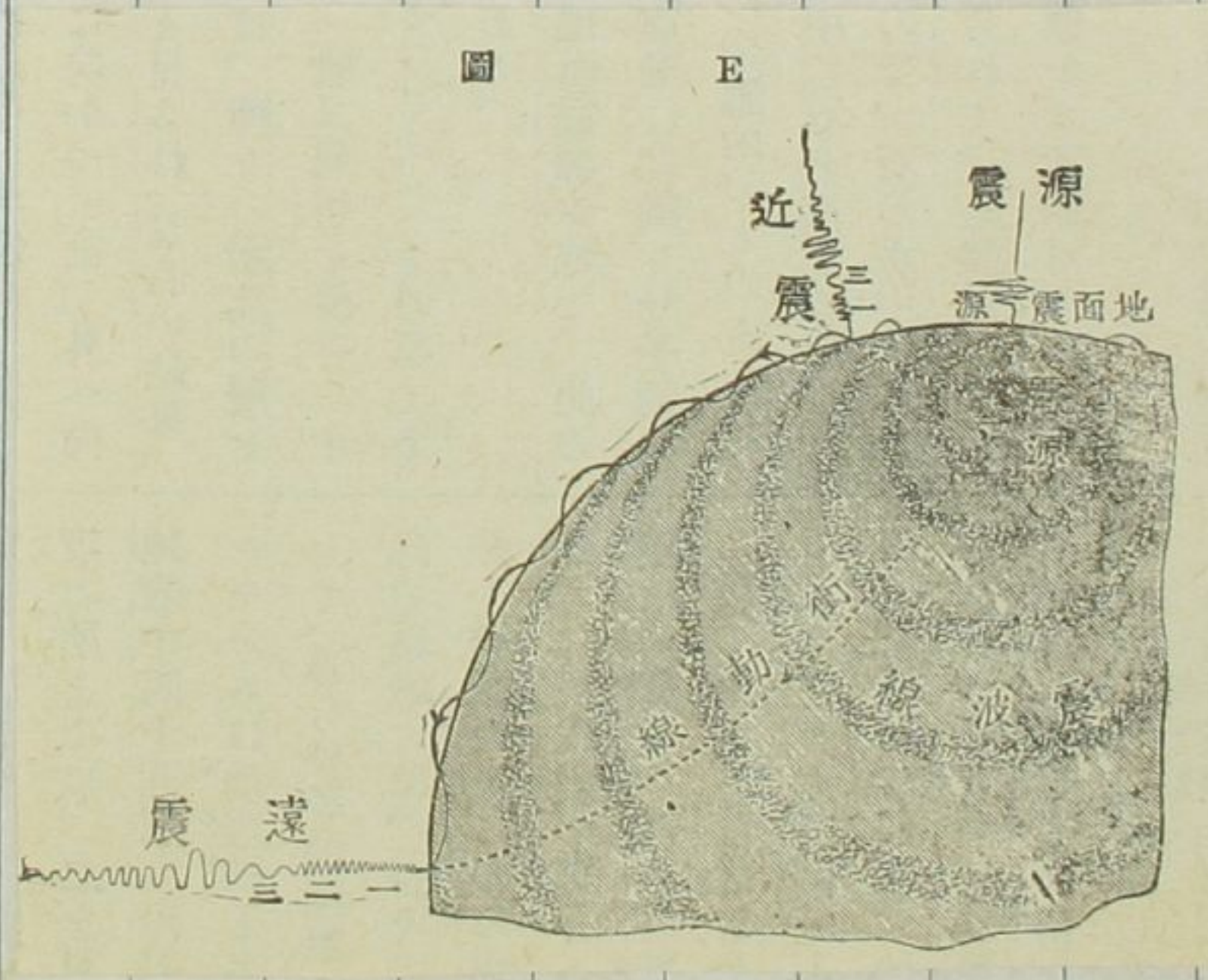
次ぎに、地面震源から餘り遠からざる所の地  
 震は、遠震と同じく、前主後の三震相に區別し  
 得るが、前相は細別すべからざる同種の小波か  
 ら成り、之に次いで直に長波の主震相がある。  
 是には近震の名が附いてゐる。

終りに、地面震源附近の地震は單に主後の二  
 震相から成り立つて前相がない。之を源震と稱  
 へて居る。

地震に三震相あることは種々の觀測から、下

の如く説明せらるゝ、即ち後震相の主震相の餘波と見  
 らるべきものがあるから、別に説明を要し、さうして前震  
 相の主震相に比して、觀測上速力の大きい波である  
 から、蓋し震源から直接地面に達するもののみならず、主  
 震相の一面地面震源に達した波が、更に地面を傳ふ

七の心あると、又源震は前主震を区別するの事、地震  
 の直接ある波のみ、地面を伝ふ波は無い事、地震  
 尚又遠震は、其前震相を更に  
 前後の二部あるの事、弾波は縦  
 横の二波ある事、初部はその  
 速力の早い所から、二波は  
 である、尚又近震は、前震  
 相中二部を区別し、難いのも  
 距離が近い為、縦横波が  
 同時に達する事、地震  
 地震が震源から四方に擴がる  
 事、遠震何れの方面とも同速力



十二

て、震源の近來ハ地球の密度が中心に向つ  
 て次第に大きくなる所から、速力は中心に向つて外に向  
 つて少くも、大なる事、又右の結果、震源から横  
 射する衝動は、種々の密度の層を通過する事  
 から、先づ一般又屈折を受け、中心の凸側を向けて  
 曲線を描く事、尚E圖に示す通りである

地震の最も早い地震震源の地、此の所に於ける地面の速  
 くる震動は、獨りか子のみの事、又同時に全體の  
 右の如く、此の右運動の区別、水中に石を投ぐる時、起る  
 運動と同じやうな事、右の水中に石を投ぐる時、右の押  
 かくして、全體の運動は、是れから四方に圓状に擴がる事

動、即ち分子のりともある。

以上各種の運動を観測し得るものを、概り地面震源に限るが、しかし周囲の放射角が四十五度の所を以て之を認ることは出来ぬ、因つて地震中四十五度の放射角を包圍する部分とナルドハハは地震核と名づけし居る、此の核を核と稱し、その分子の運動の中心とする区域がある、此の区域より、吾々の身体が感し得る地震の割合と機械の上より現はれ、吾々の外の区域である、核と内域とを合せて震源区域と稱し、外域と之を震源区域と稱する、震源区域の震源が甚だ深い時は、地面震源の震源と稱し、及ぶと、つて、全地球面と及ぶにけり、即ち、新から地震を世界震と稱へて居る。

同様の地震を感し、地震を始む附けた線は之を同様の震源と稱して、その形は地面の性質と、震源の形とに依つて異なるものである。

(一) 同時震源の形が、多量の山々をなす地震を中央地震といつて、多くの地震を之に属せしめる。

(二) 地面震源が一個の點から、後をなす地震の形は、長く引き延ばしたるを楕圓と稱する、斯かる地震を線状地震と稱し、その内、近年の印を以て、バニヤ、ア、地震を之に属し、ある日時の震動の後、地面震源の長さは、百八十度、乃至、二百六十度。

(三) 地震が全震域に同時を感じ、地面震源を認ることも出来ず、又、日時の震源を

高くとも山来りの湯原にありて之を面状地震と稱す  
 約十年來數回たり此端西の地震は此種のものとあり  
 べし

一 地震の長廿二種ありあるが、普通の場合は、甚だ強い  
 一 中のものは、例へば、前二連へは三震おとさうて現はる  
 遠震の如きも、多くは數秒乃至數分の時を止まつて、又同じ  
 地震をも、地面震源附近に於て數秒を、遠方へは數分乃至  
 ことがあふ、一かし大地震と云ふは、隨分長いのがあふ、即ち地  
 場をこえ、大抵前二先振の地震があつて、後に所謂餘震  
 と云ふものもあふ、動のこころ、地震が長く続くと、その地を  
 地震動といひ、地震も、物を地震と稱す、大森地  
 士の研究によれば、主震は、大さげんは、大さの程、又震域は狭

けん、狭い程地震動の起る衝動の振るもいと多しである  
 況廿四年の湯原の大地震の、故震を三十二年、三  
 十四年八十二回を、計し、廿六年中の數は、僅に六十四回に  
 つたから、是れを、地震動と云ふ、即ち、長さ七七年  
 の及べりけり

地震群と混同すべからざるものは、群震であ  
 る。群震とは一個所に大地震があつた後に、引  
 き續いて、附近若くは遠方に、別個の地震の起  
 る場合を云ふのである。去る明治四十一年十二  
 月末に、伊國メッシナに大地震があると、之に  
 引續いて、北部伊太利亞、希臘、小亞細亞（翌年  
 の一月と二月）、波斯（同上）等にも、激震が起つ  
 た。是れは群震であるとの説で、原因は一個所

に地盤の不平均を生ずれば、之が影響として他  
 の個所にも、亦不平均を生ずる爲めといふこと  
 である。  
 地震の強弱を精密に知る唯一の方法ともいふ  
 べきは機械觀測であるが、素人用の爲に、フラ  
 レル・メリカルの震力計といふものもある。是れ  
 では地震を十級に分つて、之を左の通りに説明

してある。

- 第一級 潜震 精密の機械には明に現はれるが、人ならば、餘程熟練した人でなければ認むることの出来ないもの。
- 第二級 微震 是れも機械の上には現はれるが、人なれば餘程の好都合の場合の外認むることの出来ないもの。
- 第三級 弱震 人は、静止して居る場合に限り、之を感じて、且つ其の長さや方向とをも略々知することの出来るもの。
- 第四級 輕震 動いて居る人も之を感じて、可動的の物品は震動し、開き戸は開し、床や屋根がめり々々と音するもの。
- 第五級 和震 品物は固く他に附着して居る

- 第六級 強震 睡眠中の人は目を覺まし、總ての釣鈴鳴り、壁面の鏡や額の類が動揺し、掛時計が止まり、樹木も明に振れるもの。
  - 第七級 劇震 可動的物品は轉倒し、屋根瓦は落ち、寺院の釣鈴は自鳴し、且博く人を驚かすもので建物には大した損害のなきもの。
  - 第八級 烈震 煙突折れ、壁に龜裂を生ずるもの。
  - 第九級 大烈震 建物の一部若くは大部の破壊するもの。
  - 第十級 最大烈震 家屋全潰して、地割れを生じ、岩塊山腹より轉落するもの。
- 此の震力計中に在る家屋の損害といふことは

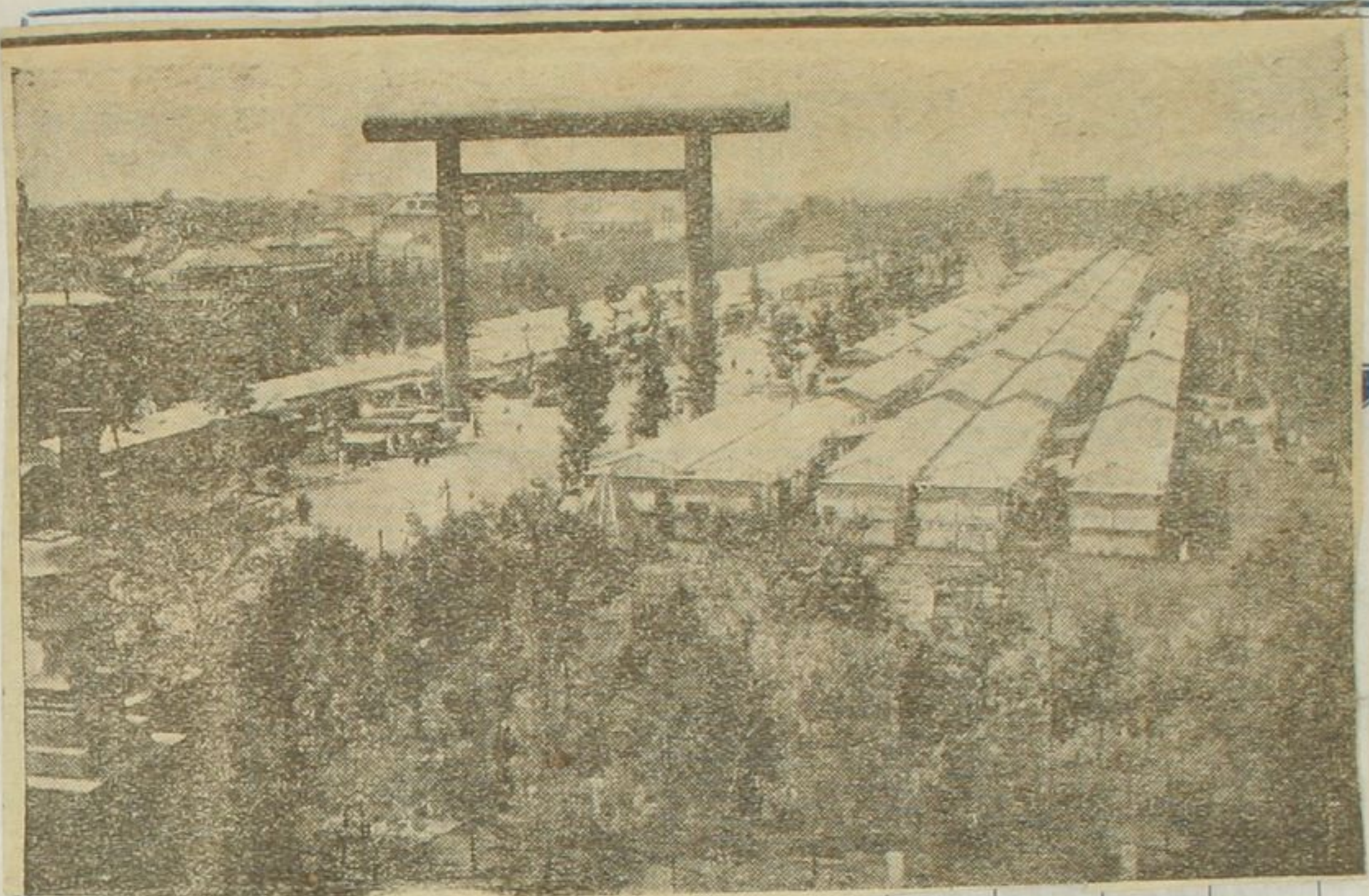
震度を計る標準とならないことを云つて置かねければならぬ。蓋し地震の破壊力は、先づ其の強さによるものである。強さとは、精密に言ひ表はせば、加速である。即ち震波の傳播速力の激變である。大森博士の研究によりは、吾が國での經驗では、一秒時間に於ける加速が二米六の場合には、一市一村の家屋の全數の二分乃至三分は毀れるが、同じ加速が三米四となれば、全數の一割五分が毀れ、三米九となれば、五割が毀られ四、五米となれば、八割が毀れるといふことである。

既に述べたハラウラ家屋の出来をみる、九米級の強震の  
 入口、一割の大夜燈(不道)の照圖の二字刻(ある分り  
 山崩壊(且つ破壊をみる)外、他に格別の破壊をみる、九米  
 の破り口の自然石も積りたる大夜燈も折れ、(

の破壊が、今も此の  
 見ぬ事、罹災地をみる、  
 ハル光が、市見町より九米級  
 なる全中とおもひを燒失し、  
 する事、無事かあるか、  
 隣り、山崩壊、もの、  
 の、七、燒け、洋、  
 有る、の、  
 佛、  
 此、の、  
 燒、

そのもと山崎にあり、二基の銅像、川上地方の徳を以てさ  
 げし、山崎の子のとき其基の石あり。銅像は若くはメ  
 千やくは壞り、今取り戻らん、其の神を離るるは  
 一時地上に垂し、たることあるの徳あり、二足あり、神社境内  
 左より右三列四列に多く、バラック建てと、路面に四  
 るり高底を充て、其の後よりあり、たは石を、結構他  
 のバラックに比せん、軒堂をを体也、大村の銅像も  
 今も無る、此、越前領り、山崎し、たこと、新成、徳に、横り  
 かり、得らん、目取を、丸板の上より、立つて下所を、望ん  
 神田より、路少の町、さし、た、徳田町も、満目、バラックの、石根  
 の白きを、又、七石、紅葉の、塔状、可し、坂の片側、の家屋七三  
 山崎し、居らん、三層、の家屋二、三、ハ略、と、さる、半、ヶ、瀬

の公園、と、西、難民の、飯、た、を、以、つ、て、元、と、り、結、構、部、も、不、体  
 敷、と、し、神、祇、社、境内、の、バラック、と、を、全、く、品、を、異、つ、ち、り、尤  
 飯、た、も、し、電車、一、つ、り、四、谷、を、行、つ、て、赤、坂、の、湯、池、に、到、り、此、乃、赤  
 坂、赤、坂、の、湯、垣、を、故、十、間、破、垣、也、を、亦、あ、り、湯、池、と、而、し、た  
 る、一、帯、の、家、屋、と、火、災、に、日、羅、り、皆、焦、土、と、な、り、畢、つ、て、り、  
 此、迄、を、酒、造、り、料、地、を、持、合、成、造、り、軒、と、無、く、美、言、を  
 列、ね、る、跡、金、宮、さ、し、以、此、景、を、一、朝、昔、と、な、り、城、垣  
 矣、娃、今、何、ん、と、ある、や、其、路、方、也、り、更、く、電車、一、つ、り、  
 赤、山、日、行、く、と、此、の、長、き、一、帯、も、を、石、根、の、垣、を、さ、し、り、も  
 く、見、る、位、も、僅、く、二、三、七、さ、き、煉、化、の、大、建、築、部、使、局  
 の、崩、潰、し、る、を、見、る、の、み、山、崎、神、宮、の、外、苑、と、建、て、ら、ん、れ  
 湯、垣、の、臨、時、高、段、の、式、十、字、の、バラック、の、節、目、立、つ、て



見わたるのみ、外見を成人とをきく  
 見えぬも田部と外見のことく  
 ちゅうやあつたも家も壁と破損  
 したりとてくう、大隈侯の邸  
 ちも今も壁も塗り直しあつた  
 人と損傷の痕跡見えてくる  
 百んも高はせあつた大隈侯の  
 殿居の二ヶ所折れをを目撃  
 し、庭園中の石燈籠を以て  
 仙丸をうちあつたとも見え  
 たり、油断四谷の三河屋に三河屋  
 主、こゝもお前の破損あつて七全

左修理をせし言業一つあり

十月廿七日記

〇今も十七年前米四のサニフランニスコに大震災があつたその時日  
 本から懸念して送つた金も五十萬ありつた、今も米四の日本と同  
 様して送早く金や物増えを寄贈して来ても急務を放つたのを  
 是年の報復とも見えべきであらう、保し米四の援助の方か送ら  
 へ大である、左サニフランニスコの損害を今がの地震震災の  
 被害に比ぶると甚し、祝儀の損害も亦甚し、保し米四と同様  
 せん、保し米四の損害も亦甚し、保し米四と同様  
 の被害も亦甚し、保し米四と同様

〇今も地震災に大災か前者も甚暴威を拂つたが、昔しの  
 頃、今もいしく人力も、頼つたら、いくらの損害をのらう、得  
 ないであらう、猛火の河を焼くを免かれば、建物を保つた結果

あるにあふ、へかゝるもの味しと無いらはせう、一概に取れ七  
一丁の火保に依頼し、誤りの元であつた、何人も不可抗  
力の除風例を、あるを思ひ、つらから、満ける最中、保陰  
金を取り得べしと、大抵を胸帯をやつた位、よゝた、荒し  
地震の場合の火災に保陰金を取れぬと知つたら、曲り、  
七人方、防衛を試み、たゞ、一概に火保に依頼するの  
非なること、**まず、保陰金を、普通の火災の場合、  
く、主征にんが、普通のの場合、七、  
よる、く、無、焼ける構、いぬ、と、  
心掛を、今、火却せ、く、  
す、と、  
ら、と、  
と、と、**

不ウ井のチを断ることせず、唯、  
る、の、  
と、を、  
池、  
こ、  
大、  
ま、  
リ、  
ハ、  
の、  
の、  
又、



災が起りても防ぎ難からぬ、<sup>諸官</sup>諸官廳を皆焼けて大  
切なる書類も持出さぬと云ふが、内務大臣西郷のこ  
とで火災目録の記すまでもね事の時はあつたが、諸役  
人も防ぎ難けしと爲る千元の出費する持ち出さぬ取ら仕  
束もある、金体官吏とて誰を食ひし居るものが、コシナ  
観念があらば、<sup>自</sup>自らの責任を負ふものは未とせぬ、<sup>公</sup>公  
衆だが、公私共に火災に應ずる心持は訓練もあつた、<sup>大</sup>大  
火災態がおこる、<sup>區</sup>區彼の内務大臣の責任を負ふこと、<sup>大</sup>大  
あつた、<sup>出</sup>出したとあるが、<sup>自</sup>自治體的の吏員の方が、<sup>責</sup>責任観念が  
ある様に見受けらる、<sup>通</sup>通任や累高務や根本とするべき、<sup>帳</sup>帳簿  
を悉く焼失し、<sup>此</sup>此結果も今此の株主も海軍郵便の貯金を  
<sup>帳</sup>帳簿も焼失したこと、<sup>七</sup>七もするきり、<sup>己</sup>己のふと云ふ不便極

このこと、<sup>此</sup>此を未嘗有の大災の結果といふ、<sup>後</sup>後人、<sup>責</sup>責任  
観念が、<sup>平</sup>平生コシナ場合、<sup>責</sup>責任訓練や心持は、<sup>あ</sup>あつ  
た、<sup>マ</sup>マサカに、<sup>此</sup>此の火災態も、<sup>さ</sup>さうなものであつたか  
、<sup>都</sup>都合、<sup>救</sup>救急も、<sup>記</sup>記つた、<sup>と</sup>と、<sup>恰</sup>恰む、<sup>大</sup>大倉大火のこと、<sup>き</sup>き  
、<sup>の</sup>の、<sup>あ</sup>あつた、<sup>さ</sup>さうな場合、<sup>視</sup>視察、<sup>あ</sup>あつた、<sup>後</sup>後人、<sup>其</sup>其の、<sup>皆</sup>皆  
逃け出しては、<sup>是</sup>是の、<sup>あ</sup>あつた、<sup>と</sup>と、<sup>火</sup>火災態も、<sup>さ</sup>さうなものであつた、<sup>今</sup>今、<sup>後</sup>後  
外西の、<sup>災</sup>災、<sup>後</sup>後、<sup>上</sup>上、<sup>空</sup>空も、<sup>爆</sup>爆、<sup>落</sup>落、<sup>さ</sup>さうな、<sup>下</sup>下、<sup>し</sup>し、<sup>ど</sup>ど、<sup>ん</sup>ん、<sup>雷</sup>雷、<sup>威</sup>威、<sup>を</sup>を、<sup>思</sup>思、<sup>ハ</sup>ハ  
ぬ、<sup>も</sup>も、<sup>限</sup>限、<sup>ら</sup>ら、<sup>ぬ</sup>ぬ、<sup>が</sup>が、<sup>の</sup>の、<sup>駭</sup>駭、<sup>き</sup>き、<sup>も</sup>も、<sup>四</sup>四、<sup>家</sup>家、<sup>有</sup>有、<sup>事</sup>事、<sup>の</sup>の、<sup>時</sup>時、<sup>を</sup>を、<sup>あ</sup>あ、<sup>り</sup>り、<sup>し</sup>し、<sup>と</sup>と、<sup>現</sup>現、<sup>出</sup>出  
、<sup>し</sup>し、<sup>に</sup>に、<sup>換</sup>換、<sup>る</sup>る、<sup>もの</sup>もの、<sup>あ</sup>あ、<sup>る</sup>る、<sup>随</sup>随、<sup>つ</sup>つ、<sup>て</sup>て、<sup>今</sup>今、<sup>も</sup>も、<sup>得</sup>得、<sup>に</sup>に、<sup>甚</sup>甚、<sup>しい</sup>しい、<sup>任</sup>任、<sup>験</sup>験、<sup>も</sup>も、<sup>火</sup>火、<sup>災</sup>災、<sup>態</sup>態、<sup>を</sup>を  
未、<sup>来</sup>来、<sup>に</sup>に、<sup>係</sup>係、<sup>る</sup>る、<sup>と</sup>と、<sup>ぬ</sup>ぬ、<sup>取</sup>取、<sup>上</sup>上、<sup>下</sup>下、<sup>共</sup>共、<sup>に</sup>に、<sup>心</sup>心、<sup>掛</sup>掛、<sup>け</sup>け、<sup>ぬ</sup>ぬ、<sup>が</sup>が、<sup>あ</sup>あ、<sup>る</sup>る、<sup>事</sup>事、<sup>の</sup>の、<sup>早</sup>早、<sup>の</sup>の、<sup>少</sup>少  
、<sup>し</sup>し、<sup>む</sup>む、<sup>う</sup>う、<sup>の</sup>の、<sup>鮮</sup>鮮、<sup>人</sup>人、<sup>が</sup>が、<sup>暴</sup>暴、<sup>行</sup>行、<sup>を</sup>を、<sup>敢</sup>敢、<sup>て</sup>て、<sup>し</sup>し、<sup>に</sup>に、<sup>任</sup>任、<sup>じ</sup>じ、<sup>ぬ</sup>ぬ、<sup>あ</sup>あ、<sup>ら</sup>ら、<sup>ど</sup>ど、<sup>人</sup>人、<sup>心</sup>心、<sup>が</sup>が、<sup>動</sup>動、<sup>搖</sup>搖、<sup>し</sup>し、<sup>た</sup>た、  
物、<sup>銃</sup>銃、<sup>の</sup>の、<sup>武</sup>武、<sup>器</sup>器、<sup>を</sup>を、<sup>有</sup>有、<sup>る</sup>る、<sup>敵</sup>敵、<sup>軍</sup>軍、<sup>が</sup>が、<sup>初</sup>初、<sup>め</sup>め、<sup>に</sup>に、<sup>未</sup>未、<sup>だ</sup>だ、<sup>と</sup>と、<sup>な</sup>な、<sup>る</sup>る、<sup>事</sup>事、<sup>の</sup>の、<sup>如</sup>如、<sup>く</sup>く、<sup>有</sup>有、<sup>る</sup>る、<sup>根</sup>根

狼を極めることせらるる、斯く極まる冷戦の事を変するの  
 尤も大切であるが、是れを教育に待たせしめ、つら外に無い  
 の教育をいへるの喫緊問題であるが、是れをいへるの大  
 り得る種々の死傷が尤も大なる教育にであるの、今がの  
 で政府と都民とが、お島の覚悟を以つて有るの日に、傷  
 とか無ければ、此の大なる天譴を大い何とする (十月廿八日記)  
 の、今がのとき、大災の品仕末と真の多端をいへる、都  
 市復興の前、喫緊するを、是れをいへる要件と、是れをいへる  
 である、今がの、其の目だけを、挙げる

- 救助品配給 金融 火保 被災証券類の
- 変理 救貧 假居設備 火燵の救心理
- 被災品の仕末 減免税 風紀取締

暴利取締 電化電話回復 水道瓦斯修理  
 失業業者救済 橋梁修復 被災戸籍志回復  
 地区設定 貯金振替手帳整理 電線鐵道修理  
 入浴設備 悪疫防疫 権理保護 教育事務  
 人心緩和 非違糾正 死体仕末 郵便通運回  
 復 地面救心理 夜救急 小災救急 (暫く屋)  
 ○米面から大戦の必要から単純化 (シムプリシオン) が、具休  
 的に行ふことの、為の、物を節約すること、が、莫大の、と、その、無  
 用の労働を省き、廉價の物を、取り出す、と、此の、単純化、の、又、  
 社会の、良習、増進、である、日本、の、長い、習俗、が、實際、用、子、  
 と、ぬ、家、の、労働、を、省、く、こと、を、い、へ、る、こと、の、例、  
 ハ、帯、地、や、友、物、の、耳、と、唱、へ、る、よ、う、な、果、つ、た、米、を、煮、る、場





地多 大損 害なり、丹山 山神に 捧ぐる 租税の 如きとあり、  
る 凡俗の 勢海 天竺の 美を 示すに 在りて 勢海に 凡俗  
の 敵と ありと 見ん、 時に 勢海に 未だ 災害と 天譴と ありと  
きと ありと、 近年の 積り 多くの 富貴者 災害を 被り  
最ら ありと ありと、 その 凡俗 儆め 淳美 流れ 其の  
結果 此の 等の 喜樂 場と ありと ありと ありと ありと  
ハ心 ありと ありと ありと ありと ありと ありと ありと  
の 廻る 廻る 廻る 廻る 廻る 廻る 廻る 廻る 廻る 廻る  
夏 過る 過る 過る 過る 過る 過る 過る 過る 過る 過る  
四の 因を 為す ありと ありと ありと ありと ありと ありと  
の 害此 天の 殊と 地等の 地域に 甚し かつ ことを 思ひ 念ひ  
すと 之れを 天譴と ありと ありと ありと ありと ありと ありと  
何ん ありと ありと ありと ありと ありと ありと ありと

喜樂の 地域と 一朝と 恐怖の 地域と ありと、 今後 地等の 地  
域の 設備と ありと ありと ありと ありと ありと ありと ありと  
七の ありと ありと ありと ありと ありと ありと ありと ありと  
リつと ありと ありと ありと ありと ありと ありと ありと  
志と ありと ありと ありと ありと ありと ありと ありと ありと  
水と ありと ありと ありと ありと ありと ありと ありと ありと  
と ありと ありと ありと ありと ありと ありと ありと ありと  
ハ 此天 譴を 体して ありと ありと ありと ありと ありと ありと  
○ 此天 譴に ありと ありと ありと ありと ありと ありと ありと ありと  
者と ありと ありと ありと ありと ありと ありと ありと ありと  
功を ありと ありと ありと ありと ありと ありと ありと ありと  
の 流る 横溢と ありと、 地震の 天譴と ありと ありと ありと ありと

論をどうあるうと云、明者のお鉢と大改定三回いふべきであ  
る、但し自分の御里、秋後かき道伴と云ふのをテト腑の後  
ちぬ、地脈を断り連絡があるが、秋後かき天譴のお招伴の  
酷比と云ふにけし不暇を喝くると、京都の切人か之れを歩  
いて、秋後七近年、石油が先人の噴出、一層暑帯を為すとい  
ふ、多く若一の質朴の風、夏に天譴の招伴を強ち  
無理といふ、ぬと云ふは、自分の解疏の詞を、困  
ん心

○東京の地層や地質や其地の埋蔵物を、を述べ、うらも災  
後の地層の時様である、と云ふて、その道の、さきと切り、努力  
して、つと、そのことを、まへに、平生、気の、つと、ぬ、校、ま、む、地、の  
方、法、が、今、か、を、あ、う、く、と、い、ひ、ぬ、と、東、京、の、地、形、が、全、く、赤、保

である、家屋の、あ、る、は、な、な、掘、つ、と、試、み、う、う、と、思、ふ、あ、ら、出、来、か  
う、に、家、屋、の、あ、る、は、な、な、掘、つ、と、試、み、う、う、と、思、ふ、あ、ら、出、来、か  
あり、地下、に、雷、白、車、や、機、を、ま、ま、と、試、掘、を、あ  
す、ま、り、り、の、新、の、ま、日本、橋、を、の、地下、と、地、層、の、関、係、が、七  
十、尺、七、下、ま、掘、つ、は、な、な、と、あ、つ、と、地下、と、市、の、困、難、に  
あ、る、こ、と、と、言、ふ、て、あ、る、が、母、障、碍、を、解、け、ぬ、と、他、の、地  
鉄、を、試、掘、す、と、此、時、に、あ、ら、う、東、京、が、沖、積、層、高、松、橋、層  
に、出、来、て、あ、る、と、い、ふ、と、ま、ま、を、保、御、す、の、正、合、さ、る、こ、と、を、今、ら  
ハ、出、来、さ、う、つ、に、ま、ま、も、を、あ、ら、ハ、ウ、キ、リ、か、つ、こ、と、も、出、来、よ  
う、に、其、道、の、ま、ま、の、家、の、ま、ま、に、あ、ら、う、と、云、ふ、一、い、の、を、神、田  
の、神、下、の、下、谷、方、面、か、う、入、り、込、ん、て、あ、る、窪、地、に、湯、湯、其、を、あ、ら  
一、つ、の、は、な、な、掘、つ、あ、つ、と、い、ふ、こ、と、を、ま、ま、と、あ、ら、う、と、云、ふ、又、其、の、ま、ま

室の丘陵が半島状をなつてゐることも分つて来たと云ふのである、  
これら人家棟瓦のなまごころを待乳山の古  
墳大形者構内の将門塚と云ふのは、是れ撮影して  
置く必要がある、将門塚と云ふのは、研究の標本に  
つては、是れを、是れを、是れを、是れを、是れを、  
江戸の文化を、是れを、是れを、是れを、是れを、  
を中心として、低地の、是れを、是れを、是れを、  
来に、是れを、是れを、是れを、是れを、是れを、  
ゆや、是れを、是れを、是れを、是れを、是れを、  
極全の代、は、是れを、是れを、是れを、是れを、  
が、是れを、是れを、是れを、是れを、是れを、  
ハ、是れを、是れを、是れを、是れを、是れを、

駿河を、是れを、是れを、是れを、是れを、  
あ、是れを、是れを、是れを、是れを、是れを、  
また、是れを、是れを、是れを、是れを、是れを、  
戸川が、是れを、是れを、是れを、是れを、是れを、  
のこと、是れを、是れを、是れを、是れを、是れを、  
昔、是れを、是れを、是れを、是れを、是れを、  
を、是れを、是れを、是れを、是れを、是れを、  
つ、是れを、是れを、是れを、是れを、是れを、  
の、是れを、是れを、是れを、是れを、是れを、  
以前の、是れを、是れを、是れを、是れを、是れを、  
有、是れを、是れを、是れを、是れを、是れを、  
いて、是れを、是れを、是れを、是れを、是れを、

（和名から出た）

千鳥石ももあつて千貫目の重さであつたといふが、コシチ  
との名保石をまけん心後にも煙滅を附せんといふあつた  
の東京を維新の巻を以つて界とて江戸時代と東京時  
代とを畫して見ると、東京時代を以つて六十年をこつて  
あつたの六十年間の東京市の發展を史上に類を絶  
つない大層のものである。維新の兵燹を免れ、江戸  
の市街を、江戸時代の文化を継承してよかあるか  
ら、維新封建が整つて一時江戸を非常の表景を  
し、とちろい東京遷都して後活して此都を江戸  
時代と見ふ所の少くもぬれをさすもさういふ、さういふ西洋の  
物質文的の感に東漸してのち遷都後のこととあつ  
て、それらといふも、今も東京を江戸の面目を改めれば

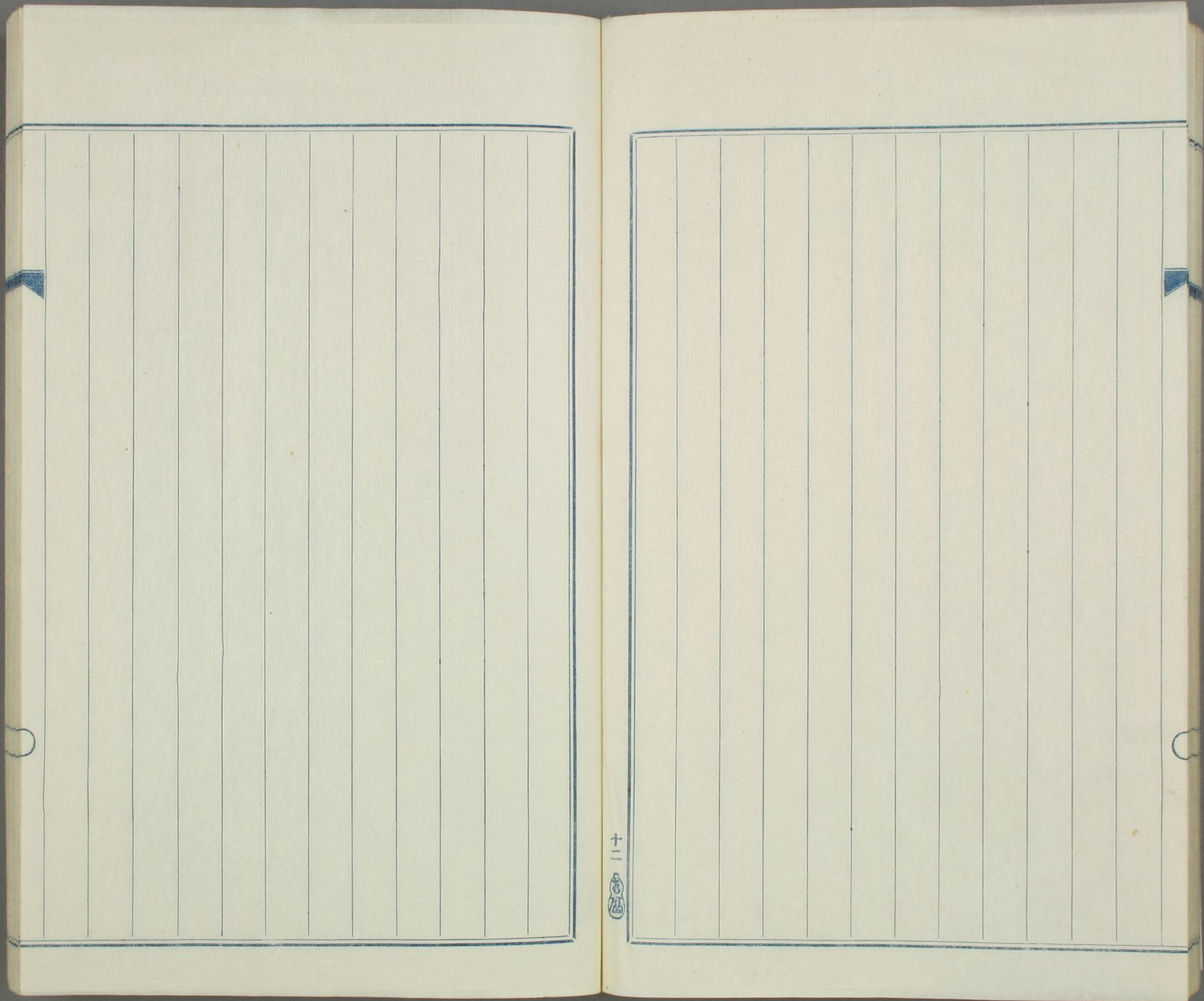
あつたの五六十の河をとり、海口露路の大戦もあつてあつて共  
に日本の勝利に帰し、近々改選の大戦もあつてさういふ  
参加して日本が亦戦捷の列に入つた。こんな仕入のこ  
とが其都府才一首府を東京といやう上に發展  
を生じて、真の長足の進歩をして、勿論日露の急激  
の進歩も、其論がけつたのも又其の勢もある、啼み切ん  
るの内、嗟下するの無理があるから、おのつて、今も傷も  
起る道理もあるが、外視も先にも申す流に成つた、相  
違ふの、所謂成金の圓の表を、決して俄に合限である、  
危ぶるものゝた、た、た、た、た、た、た、た、た、た、た、た、  
僅々半世紀むづうの間、さういふ、た、た、た、た、た、た、  
見るも一瞬である、た、た、た、た、た、た、た、た、た、た、



松を悲しい追懐とすれば、東京市のライズ、アインド、ア  
を備うん半世紀の河がある、世界の歴史からその実を  
堇花の短命七回しく真は倏忽の河がある、急激を得た  
文化と承急激ふ失はれぬ約束のこゝか、これこそ全  
投換河がの暴走を得て栄花をの極ある河もろく一敗地  
に塗るゝ貧寒の域に陥るも曰く、皆は悲愴である、志  
かし此の悲愴の境に立つて既往五十年の移の迹を以  
つて見るも感慨が尤も深いのである、自分のこととき  
今六十四の齡にヤット老境に入つた位であるが、明治八年  
まゝ、向江戶の狀態が大い部分存してゐる時、初め東  
京に移つて来て、まゝ、今日まで都を住してゐる澤  
ら、東京のふる邊の河の中へ生活をつけたら、あつた

る、乃ち其の河に在るのライズも、アインドも、  
聴き其の河の流の七回目、元は七の河である、二十年代  
位の人と其の榮時代と、河を其前より、  
二死し、人々を其の大變を知りぬ、え、  
この河に生んる乳臭を復讐の、  
お、何れも、由る、  
縮む、  
う不幸、  
幸と云へば、  
あつて盛衰、

早晩免え難いと見えしか、大向此の程に不幸の大段を見  
るのを、終りの局をい済割に全向をい終りの局をい、一船をい此の意味からすると自分  
を仕合ふとも云へるべし、但此の大度のアガリ見てアガリ、改生  
を送ることが、生れ此の不幸なる事、ト出遇此無意味  
がある、多くの人と災禍を罹つて、こゝろ此と見え、女と見え女  
一二十年乃至二十年三十年生を延ばさぬ、ハ女と見え、女と見え  
隠退を免ふすもの、ハ女と見え、女と見え此の豫  
みる、ハ女と見え、女と見え（十月三十日記）



「橋代永の那利」



鳥居言人畫

○山陽史多録に記載を要する材料一二を得る

左の書事子の乙の初々山陽死後長子伝一二其く其を  
此方の初何れの家にて居りしと記す、木崎好尚の  
家庭の山陽死後とあるは花若の名を記す、其  
ハ先づ角七女何れも云及、初書傳の邊にて、簡文  
まゝに實に上乗の山陽、山陽の古蹟を比し傳  
るゝと録をえん

乃く去年秋多橋上御別状如目折角七松を  
御拉起被下、何分父子離別便少くも才あてらん  
よと御申被下、在耳、又なるの此に候  
吉侍御多御永逝之状、又入し、御慈傷之名  
有、實に從來之御在、意如え申、御文由候るを

松毛拙七入新陽申候、志拙七正月四日、先考之法  
多、在由申、於彼方御咳血之状、御候、在也、此に  
成行と、石存、在、因守、此七、在、御候、御候、  
知、此、其、中、御候、御候、自、今、思、記、候、心、山、月、三、日  
朝、三、樹、之、告、別、申、候、實、も、行、成、果、方、方、  
又、冬、候、一、日、有、面、之、面、別、是、永、訣、と、成、り、又、  
御、送、り、白、梅、花、別、菊、花、之、詩、識、を、成、り、  
感、佩、し、也、尤、十、月、二、十、二、日、此、山、内、御、申、出、立、に、  
何、分、御、馬、中、に、拜、神、主、候、御、申、存、道、中、申、下、御、五、  
十、日、正、南、に、着、京、在、候、三、樹、之、焚、香、申、候、宣、三、殘、  
念、無、限、候、先、拙、在、京、七、三、樹、逢、御、之、承、過、半、候、  
此、印、御、難、候、御、候、在、候、三、樹、之、神、主、を

拜々々、瑞二家無貴恙候、老拙も道中上舟中、  
舊習より一宿申、玉母乃七却悔み、上り候、いかに  
御し出回感々、竹田翁も七拙造山間同の二被承  
聖は拙も同座、同座申候、此七山出宗と申候  
七拙也、聞訃七成博宣申、連候間、心身古付入貴  
兄候、其外花侍、之送外、之危、古付入貴見、  
又唐入沈洋、多と、之老侍と云、飲茶、人見  
拙が雪鴻舟、一待出候、候、昔言入貴見、  
多及、病之却候、迄も、七老侍之責、天下安んじ  
存、心地不獨、吾輩之所言、平生如口之堂、七以貴  
情の、之、以、風、中、候、唯、之、日本外史、皇朝政記之  
大若、此、當、天地、之、間、候、事、也、此、上、辱、存、心、緒、如

雲烟候へ七省之候、拙者

潤月十二日

雨草 大倉

秋能一掃

十月廿二日、山陽名見訃、帳札有也

正月才三〇、有回行見君、而今為永訣、不但嘆離群  
冷雨、之、木、寒、鳴、呼、海、雲、心、切、同、雪、把、酒、樽、河  
濱

必君常此病、使我數搖心、香禱如醫、治、何、回、病、亦、音、  
憂、来、天、地、暗、感、至、海、深、恍、惚、真、邪、夢、追、憶、不

可尋

一相三州列千載九泉悲。袂濕新愁淚。囊收舊送詩。  
情就常有信。今見竟無期。北望沈思久。如何妙典  
見。

偶見父訃翌。因座竹田見。有感平生望。無為後死情。  
原紙修史業。豈獨主詩聲。共惜天才美。於欽不朽  
名。

訃未初忌日。時將從行裝。歸路力無賴。近川坊自傷。  
論交心亦淡。問路道山長。追福悲岩寺。誦經吾在  
香。

小林詩中曰。同社元瑞外。西阪隔雲海。雪華与竹田。  
他日山陽函。流涕孰後先。亦四首云。晴。此併告

雪華一合

三折のよき亭にて

山のいろなり流は貫きし。比一の心とて。七合云々。  
又貴文を乞ふ

丈夫のよめまう。いろはさの文に子と。その後地  
又古山本寺。若老前云々

此人を比山の上。比湖美ん。心若る。あの人。松原の影。

○山陽と姫路藩の関係を余の意を録。今を記す。を編む  
補遺を要す。こゝに一二資料を録す。

頼山陽より姫路の太夫守の蔵に依り日本外史を問

藩至三献し給ふことと隠のちる事案より山陽年記  
の進献書と七と姫路藩好古社の御采りしと今と  
同地西澤香花氏御采りしと系、其文如左

此書事案恐考索未備、未肯示人、丁亥(文政十年)之  
夏桑名左候使来、本親、藉以其元老、辭、不敢遷延  
以未定、辭、速、得、旨、應、命、將、賜、報、答、過、蒙、稱、許、已、而、矣  
候、即、世、矣、今、前、又、承、姫、路、藩、命、未、索、裏、既、時、經、老、矣、  
誅、又、感、受、其、知、不、敢、有、所、改、依、原、行、歸、進、仍、以、爾、時、上、書、  
呈、旨、間、以、代、序、例、此、本、雖、經、一、校、不、保、無、誤、誤、此、其、取、彼、  
本、雖、對、對、動、藩、同、体、往、來、必、親、故、敢、言、之、

文政十二年巳丑臘月

賴襄拜手謹識

因云云山陽の外史再校の事、係、文政十二年十月

五日、始、同、十、九、之、を、り、を、と、り、を、り、を、り、を、り、  
本を交へて、い、い、の、校、正、を、し、と、察、せ、し、

姫路藩(主酒井忠實)の家老河合卓之助(寸室)と  
安政二年、藩考、に、別、在、地、と、阿、保、山、の、二、區、(今  
の、節、原、郡、阿、保、村、に、あ、る、仁、壽、山、に、い、ふ、)を、考、へ、こ、こ、  
の、名、を、と、り、け、藩、の、ち、年、子、を、寸、室、と、す、あ、る、の、大、い、な  
神、を、と、つ、と、め、寸、室、と、山、陽、と、を、相、識、ら、せ、し、し、  
其、の、名、を、寸、室、と、す、故、に、桑、名、場、に、い、ふ、使、を、將、也、と、す、を、以、  
つ、て、藩、に、聘、せ、ん、こ、と、を、い、へ、し、山、陽、を、考、へ、し、寸、室、  
と、の、交、り、を、い、ふ、寸、室、と、い、ふ、京、河、に、往、來、の、途、次、也、と、  
仁、壽、山、校、に、寸、室、校、日、若、く、は、好、月、清、等、を、考、へ、  
を、教、授、し、以、つ、て、寸、室、の、知、名、に、酬、へ、ら、る、と、す、後、年



寸苗の巻の河合惣兵衛公尊王の大義を唱へて幕府の獄に投せんと終に自刃せし如きも山陽の甚重陶の二七のと解せしむ。

山陽の死や世帯の漸西六家詩鈔歌飛類に山陽の評あり以の題次中仁壽山云々とあり、前述の一項と卷昭とすべし。一説に山陽初を寸苗に及し時寸苗の刀ハ床の間の刀拵にこけあるに山陽を次堂に委棄しありしを山陽横り咎を起して抱へんとすをあの町奉行を勤めたる伊奈平八(一苗の身丈と稱せし人)氣がつき面を激し漸やく山易の怒を解き自らとあり又摩訶南を二る世十石に抱へんと入ん等と記し松南と前山陽を二る石に抱へんとし等ことを知りあり

此を條存すとす。極絶しつとの夜七時併せ録す。○木島好者の家庭の頼山易附録に三四猪飼放不の香筒を収め、皆山易の事と関す、こんも材料とこの材出す

伊勢の川村井坂に興し千箇の内

當日初頼山易他、終ん候文二首、右拙くお候被致、愚長の前正政の、其甚篤之文、從以被申、且右拙業、削之その好を併せ、其へと被照候、右拙業、削之不隠、石種多、之氣象感入候、彼水亭、を此に二解せんと申候、候、ハ口と卷り、未刻過、二更とお召し、举杯和薄、の史を後、候、任寄、あ多く不、通、人、右拙業、右拙業、と甚被責、外史、并、此、即、若、由、の、通、一、間、を、被、被、候

内人(里志西)七被出、御意大に親中を、授子ニ瑞年を  
免拙往年を、彼人を知ると存に、家果然り、京河を  
可共後者北人と存、(月日欠、天保三年?)

又同じく

高月十日、山陽吐血を、自力大に、懼れ、動死を  
候へ、侍親の元氣も不易、左に有る、此の事、  
廿日免拙功、家、進て、快方と被し、元氣も免く、  
説らぬ、此後保善の被後、却て保善一の被申と存、  
膳所の人、高田出雲、山来山陽と甚親しく、通儀を被  
贈、あゝ外史七可贈と約し、先、高田方、  
識一説、山陽を、城、東坡の流、世の才子と  
東市免拙、彼人の眼、空一世、四月廿日、被招候て、在

為、同、此、事、考、う、法、治、め、其、節、免、拙、今、時、の、保、善  
あ、り、と、同、を、免、免、井、元、鳳、(昭、陽)は、西、國、の、田、舎、漢、在、賀  
桐、唐、ハ、江、戸、の、田、舎、漢、皆、天、下、に、現、存、不、通、と、思、意  
こ、こ、此、論、而、も、と、存、一、此、り、(六月廿日)七、替、的、法、治、留  
免、候、ハ、其、免、免、の、法、難、者、之、候、免、免、ハ、又、後、こ、の、於  
と、一、由、り、候、未、月、月、夜、に、又、法、の、こ、候

六月廿三日(天保三年) 猪飼敬不

川村貞徳

又 河波の高橋末永に、通て、一、と、り

頼山陽、京河候て、杜子十九年前と十一年前と、  
丸山其傳の、法、治、の、事、を、解、説、い、つ、て、而、も、今、般  
壽、延、(七十、年)仁、科、白、谷、首、唱、を、し、ち、り、南、旋、い、つ、て、

白谷といふ年姪路を年論有之、互々相嫉する、作伯の儒臣  
中尾増太(米澤)玄夏もこの道子壯年を論じ、又三長  
い、江戸島平塾の教年を論じ、江戸の才名あり、  
此中尾、頼子も仁科も、頼子も中尾も、拙子も  
賢の文を勧め、頼子も平生拙子を推して、  
欣び、頼子も二重説をばり、出席の志あり、  
而も不登、文章の不出し候、彼文、拙子を論じ、  
不登、白谷大の怒り、此候を以て、其文の疵  
瑕を指摘し、或は此文を我れし、収録す、  
其之候、野拙思ひ、頼子も出せし文、  
其厚に及らば、心、不思、且、此候、  
何れも三人も、頼子一人、  
十二

何れも三人を譲し候、其拙子を稱する、  
其美の文あり、中尾が序、平安山丸の之素能、  
鐘り、と、溢美、深脈の詞、畢竟文人の弄筆、  
勝後候、其能も、多、此候、  
此の論止む難く、拙子の先月、  
而も、文の疵瑕を指摘し、  
と者改候、  
體、  
得、  
の文、  
何れも、

七、皇太子に感責、其傳の著述又方と云候、自著の外史  
一、説教下、傳と云来、拙子と云、吐合候、拙子、耳、説、故、  
一人、人生、在、に、重、彼の、所、生、も、一、人、次、の、可、控、候、は、  
お、後、事、ハ、天、白、頼、文、名、有、候、故、此、文、世、々、  
弘、明、の、由、書、之、入、貴、説、(天保元年)

又山陽死後大和の谷三山に遊く事

山陽九月亦云、老拙、九月、十、日、下、三、山、遊、候、  
向、二、首、有、候、獨、有、精、神、長、不、死、時、於、山、卷、督、相、親、向、彼、以、  
余、為、知、也、其、言、可、傷、惜、也、外、史、ハ、十、年、前、も、余、ハ、一、説、を、  
乞、山、一、昨、年、豊、臣、氏、記、に、讀、め、り、通、儀、有、三、前、著、り、是、  
一、説、を、乞、候、去、夏、四、月、膳、所、に、遊、び、余、ハ、人、當、出、  
云、山、陽、と、親、く、山、陽、も、通、儀、を、贈、り、し、を、彼、方、一、説、

一、余、云、山、陽、ハ、眼、室、古、今、此、儀、宛、拘、儒、所、及、死、ハ、其、説、  
七、亦、有、知、一、不、知、二、者、如、人、君、身、執、政、權、不、任、宰相、守、成、之、  
君、皆、如、勳、業、之、主、聰、的、達、事、乎、今、如、京、師、富、民、三、井、大、  
丸、者、尚、且、不、能、況、天、子、諸、侯、乎、其、他、漢、論、亦、有、此、類、候、  
山、陽、ハ、才、子、不、言、問、ハ、甚、疎、廿、二、史、と、廿、二、代、之、史、と、云、  
如、書、の、多、か、く、通、儀、及、外、史、中、の、我、精、疎、謬、を、盡、  
く、筆、記、し、御、示、可、被、下、候、御、所、存、の、所、持、主、り、急、に、取、  
還、し、不、及、其、義、由、若、筆、記、被、成、山、陽、在、世、に、  
示、し、候、大、快、の、踏、也、叔、に、歎、念、し、存、候、克、拙、未、之、候、  
一、共、克、拙、多、く、未、然、後、將、又、一、年、已、前、の、著、書、  
ヤ、本、朝、以、記、と、云、書、を、著、し、い、ん、改、在、王、朝、可、の、政、  
書、を、記、し、論、八、十、首、有、之、候、由、去、秋、身、疾、の、後、人、

洋字をこゝ、一昨彼の人兒玉三郎(廣山)より山陽の後三  
巻野坂二巻を平し疎漏を校訂せんことを乞ふ書經  
の後論文を乞ふ、吾間の疎を、大に有後世の爲見  
と合す、宜きうなる平生余を而議と稱するを、他の涼蕪  
の文人の及ぶ不こある、山陽の年無行こそ、父の家を継  
ぐこと不能、これを以て世の正人、擯棄せらる、惜のる、  
年志向心路、有存於世、先づ高處出雲、山陽  
今四五十年、在世、先世と親交せし、るる、人の人とする  
べき、惜のる、余も亦思へり、彼聰明可共、後山大之  
道者、廿年、同く、京の位し、不才、此年四月、未親  
しく、る、病起、病中、三四度、訪へ、高其、余論、任、史、舊、麻  
余が、此病と、世、山陽、喜、歸、り、十二、算、の、お、兒、(十一、才、の

支筆をよる)を、一と見、あ、と、来、り、親、しく、病、状、を、見、来、れ、と、命、す  
其、深、切、る、こと、山、陽、の、余、を、候、り、る、誠、心、身、後、こ、え、也、余、於  
人有二悔、壯年、不、か、後、軒、之、学、後、故、不、從、之、学、先、年、不  
和、山、陽、之、高、才、故、不、與、之、友、如、此、二、子、山、室、易、得、乎、

後畧

正月廿一日(天保四年)

谷新成撰

猪飼前不

○由平馬路の卷、字本日本外史の巻尾に馬路の跋  
あり、余、先、年、言、一、豆、き、なる、が、御、文、を、檢、査、を、得、ず、  
欠、る、程、に、定、用、を、感、し、此、の、書、の、お、主、里、木、次、生、の、御

ふと騰字せんといふけりしは、所也七次日吉遊し、今、此字も何  
れ其の留と本場好あること、字のてんをん心こゝに解し  
おく

日本外史廿二卷京師儒者頼襄所著襄羅  
井氏修為頼字も成俗稱徳太郎彌山陽外史  
名流名人教授京師（自注文化再刻平安人物志云  
家左車局所御池北）有史才、其文匠如、論辨可  
聽、是書傳字尚稀于世、吾友伊勢飯高殿村條為  
量、以少石氏親羅井氏塾生、疎字以爲弁云、余亦借  
騰條為弁、本日者、業工告竣、因題數行於左  
天保五年隸月之吉

註士 瀧澤 解

文中「石氏」といふ元瑞の字、元瑞を殿打と親戚有り  
而して殿打と馬打今と親交あり、傍騰の所以也

文中 井山寶福寺 雪舟禪師の碑

文化十四年九月十日

藤井有為撰文  
瀧澤 頼襄書

北社 郡姓名、何年、何者、何、何

北の大人氏 大寺、海、寺、山、山、山

六月廿日 西大寺、山陽

山陽自謂子年臘月生與蘇丹為(東坡)曰

招月高詩鈔四九

○山陽曰、侍念給留、冰釋、灰冷、然及年六十、或再觀

近、亦可、  
山陽曰、侍念給留、冰釋、灰冷、然及年六十、或再觀

再後取之、不至京矣、山陽曰、信可憫也、吾嘗買了、

再後取之、不至京矣、山陽曰、信可憫也、吾嘗買了、  
二十六歲、出居、後、玉、強、如、史、公、書、之、題、其、心、多、  
箇、中、之、情、乎、今、詳、其、情、之、由、也、信、可、憫、

玉、強、如、史、公、書、之、題、其、心、多、  
箇、中、之、情、乎、今、詳、其、情、之、由、也、信、可、憫、

玉、強、如、史、公、書、之、題、其、心、多、  
箇、中、之、情、乎、今、詳、其、情、之、由、也、信、可、憫、

玉、強、如、史、公、書、之、題、其、心、多、  
箇、中、之、情、乎、今、詳、其、情、之、由、也、信、可、憫、  
玉、強、如、史、公、書、之、題、其、心、多、  
箇、中、之、情、乎、今、詳、其、情、之、由、也、信、可、憫、

畫七のし出まゝか筆端を挑みし彼才子(山陽)を  
七お忘のそ玉椿の八千代末松山波もこえちんと契じ  
月峯のうらひ易き心契と本吾等改り玉峯  
ハ三原某氏に嫁し申、文人の歌妓店をひきりし

小原梅波詞見

柴田春樹

○余あぢく京の(おへ)ふ末に頼氏の墓を訪ひしことありしが  
頼氏の京都寺と光林寺とを證果流を此寺に在り、但墓  
ハ光林寺より七長海寺に多しあり、光林寺の墓は牢造り  
とそ山易を葬る時墓心と出寺に相し、而後此墓に於て  
あり、但し支峯の墓と身其寺に在り、光林寺より七山

陽在廿中、頼氏墓の墓を嘗みたり此の墓石を二尺許の  
より七山陽の自四君を鑄したる也、山陽致するに近び心  
式の墓より出寺に遠しなり、より遺骸を辰花の墓  
に瘞ありと曰し墓石の陰に左の如く刻てん

山紫水の居士

居士者山陽頼氏也天保三年壬辰九月廿三

日歿葬長樂寺山上瘞遺骸于此

長樂寺の頼氏墓地に支峯の撰文に記恩碑

あり、えり山陽の追賞を存せしことを主と利木  
影也史の頁に三村の勤王事蹟とも記しあり

光林寺の後小路千本通西へ入南側ニ寺地廻りの石上  
地蔵を祀りたる寺あり、兼其の地蔵と寺あり



○小休雜考三云

或問用助字之法於款子成子成曰我不知也我之綴文自謂此處必為字此處必為字若代以他字則我心不安耳蓋獨得之境有不融自言者也余謂良匠之用藥法書之用筆法皆如此豈可以口舌授人哉

○存陰の雜筆：頼家の猫の事を記す

頼家の宅患多鼠獲一猫肥偉毛色潤澤其始至也回視而將送乃食之以魚覆被數日太狎翁喜曰我家自是鼠賊可盡矣既而數旬之間捕鼠者絕一身而常出於鄰並至市街數百步之外或經宿而歸一日鄰婦呼於門曰君家之猫為群犬所齧余等赴援則已瀕死氣息喘然痕

之暖愛藥之遊死

此種の珍子化へに在りてを淡柄と為すは是れ知在比多頼氏二居  
（諸君の裁をてする不、故に録す）

○山陽政村の文房七種あり、山陽こんと題す七種あり其  
品左の如し

- 一 古銅蟾蜍花瓶
- 二 紫質荷眼海龍研
- 三 三足蟾蜍水滷
- 四 水晶蹲蟾鏡紙
- 五 豫産研山
- 六 赤粉古銅筆洗（雪舟所贈）
- 七 ぬ王熨江半春曉書函卷

此由古洞花經と余往年頼波の家と一説あり唐の年號あり  
ものゝ後金瑞の火に焚けたりと補修しつものなり也  
家庭の頼山易古昔に載せあり

○一才子二道人三村は頼波と七宮をいふことありと見え左の  
在跡之を証す

三本村橋居、略南隣頼子成 中流松隠

分酒分飲情自深、洋裁何必問高音、此亭並影一溪外、  
古巷徒隣三樹陰、六々烟峯由彩葉、區々伎倆愧塵襟、  
清風及我尤非小半榻、新涼直覺萬金

松隠傲居北隣、見贈長律、姑酬以一断句

山陽

快書楊樹和朝誦、濁酒過牆回又醒、鴨岸斜陽敵

當年月、暫將一半典君分、造於拾遺

此の在跡、文政八年（山易四十六才）四月中の事

二馬すこ

○前年田舎の石の裏にありて、山中玉峰の山守家伝の  
折書、いふに、あるに、田舎に此家と懸交あり、  
山陽の遺里とをいふ、取出して、昔と衣一物あること  
得たり、南時目睹の事あり、其のまじく、読んば、  
一あり、唯此其後、遺里と見え、し、此家と懸交あり、  
の遺里、山中一二字、一五と見え、し、此のあり、  
の遺里、其のまじく、此のあり、し、此のあり、  
を山陽の遺里の刊本、其のまじく、此のあり、  
まじく、其のまじく、此のあり、し、此のあり、

えん山陽資料 若干の内山陽家と興へるもの二も  
あり、其由一ありしに余が不記の事ありしを記し  
爰に余を記しつゝ、此の一文を單に山陽の  
めり、方簡上平にて折る月、浪横筆を弄するのめを修  
このみり、山陽の致味を最も喜曲にせしむるもの余  
が、致味の軟山陽一寸、鉄如と評せしむるものあり、

新春之慶、日出彦申收候、此に授り、被為揃、被  
成御起、歳候義と奉慶、少子無恙加年、此際、放言  
可し、申す、此に、帝定まり、此の時、此に申上候  
とき、帝を河津に候、藤井氏と、此に、方杖、つり、  
貴家、傳修、此に、不別、裁書奉詞、此に、此と、御  
寫し、此に、此に、此に、鳥、海、方、杖、此に、此に、

此に、此に、候、此に、被、謝、此に、古、時、を、作、此に、進、是、の、此に、存、  
候、此に、一、端、此に、呈、方、可、申、と、此に、今、延、引、候、此に、給、此に、一、ヤ、  
此に、は、先、せ、つ、と、此に、此に、此に、此に、進、互、候、と、徐、計、之、可、  
也、と、今、夜、排、終、此に、此に、古、也、

前、互、長、し、扱、此に、去、年、之、西、國、書、此に、貴、家、と、落、回、と、  
奉、頼、故、上、方、引、け、と、取、り、去、臘、の上、京、此に、此に、  
城、下、此に、城、上、此に、土、を、積、重、と、申、此に、此に、来、の、此に、此に、  
の、此に、此に、減、此に、爪、と、此に、此に、爪、と、長、く、此に、  
故、此に、此に、此に、此に、此に、此に、此に、此に、此に、  
流、し、目、も、不、政、と、此に、此に、此に、城、此に、此に、此に、  
固、此に、此に、此に、此に、此に、此に、此に、此に、此に、  
此に、此に、此に、此に、此に、此に、此に、此に、此に、

はち七出さす二十三日之夕に、廻状を廻し、同好社中をお招き  
床より、明王世昌之群仙圖へ是は因想之惠之振本と浪  
花より交易もの(を)掛下し、南方の御書より、孫光政墨  
蘭、文的仁山京山所を掛、所存しの表の向、種を鋪  
き伴の硯と茶く直し、次は家為平銘の茶倉蘇研を置  
き、水注花瓶を、皆、唐物も、上の向、上京之後、女  
つとく指さをも、す、牀に桐板の書架、古銅の鉢に、其節  
管申候、東大寺蘭奢待を一炬くも、(是は冬物門  
へ其先祖東大寺位體のもの有、盗置等も、七分四方程  
贈候も)酒注酒盃をも、皆、唐物、牡蠣飯(此三本  
京より能く言、小祠ひ移りて、錢のへら、挿、さすも、也  
と仕候也、同社之書共、皆、候と乾申候)是れハ、

日事きとの計、念て等にもあ、恐入、中より御  
直之硯、別而乾き、候も、キ、じ、ヨ、こ、五、六、杯、喜、掛、正、崇  
り申候、此義をも、の、り、し、ル、御、為、人、換、御、座、の、量、と  
有、く、も、由、候、と、四、方、書、東、如、山、ハ、千、ト、仰、山、ら、ん、も、堤、本  
ト、ハ、有、之、候、も、り、し、る、て、お、座、の、蒲、団、の、如、く、候、座、座  
無、事、候、と、も、得、意、先、を、い、つ、て、御、思、あ、末、者、の、族、さ、も、草  
の、銀、の、換、り、と、あ、ん、せ、大、得、意、さ、る、ん、か、一、書、の、御、禮、書、差、出  
せ、候、い、る、も、御、共、書、家、ハ、得、意、さ、る、も、御、座、内、に、有、候、候、  
是、ら、延、引、候、御、理、り、左、候、ク、ハ、千、く、廿、五、く、く、と、云  
甚、哉、濃、く、も、少、き、御、座、さ、も、似、や、御、共、左、も、あ、り、候、花  
角、此、後、七、根、城、と、御、座、に、御、座、り、候、御、座、に、在、之、廿、五、角  
之、兵、糧、何、卒、十、年、不、と、ハ、千、を、不、附、申、候、奉、存、候、

持上之廿五、玄臘二十而入申候、ノコリ廿五ハ五月也  
の儀、附之儀、京五取、金六取、五取、是と三  
月前、尚候へとも、ししと、昔、盡二幅、買ふ約束也  
リ、とん、入可申と存候

時に杖を柱をも存候、あり、何と不御座り、  
受、物に御座り、之儀、甚、為、所、ある、と、存  
御不養、生、之、子、多、く、能、知、行、一、と、存、  
上、よ、く、御、心、附、御、奉、壽、一、の、と、存、  
セ、ヨ、ク、ハ、甚、ハ、ツ、ト、シ、レ、ル、事、ハ、  
愛、セ、ル、と、由、存、候、

千、年、御、御、托、之、表、具、ハ、  
と、存、候、法、帖、書、各、押、法、村、  
十二

四、ボ、ド、ノ、目、を、ム、キ、兄、  
申、候、一、年、二、年、に、三、  
ば、り、出、し、を、出、す、と、存、  
甚、取、次、六、ヶ、取、  
存、候、  
之、時、候、也、  
正月十日

魚本契

裏

今日、圓元の人、  
は、私、庭、に、申、  
乃、為、乃、叔、不、別、  
あ、  
彼、七、代、和、

七條のりしぬるしき存そし、近々(其後)書  
おる)二の巻候

山陽の世の人をまらとぬくをんぶ、老の病を一人の想つる  
るものとんハ殊に沢瀉を弄し七人をし破顔二元を替る  
ヤしとあふ聖家と史の致味ありとひる彼らと史書を藉  
りて筆をまると、筆路奔放人をチヤカス二う如くおの  
づから始あり、徳大りの為の又自書せよと云ふ所を  
大徳意の為のひとあふと信ふあり、聖家と山陽の船  
行を貯金とこゝに預けて利殖と圖りたる也四五の  
皇綫のするべきこと此也

宛名 孟本と少本本大らのり也

○山陽平修を尋み康之を説み、梅瓶の日記を元々女  
らこちとみ教見し、そのく、聖家と史書を弄りたる也  
の相手を尋み、聖家と史書を弄りたる也、門人の牧善助を  
いひ、(幼名)を尋み、河をいひ、七上八下と見え、山陽具勤と  
善助と名をいひ、呼ぶ、これと、善助七千といふ、又いと  
河にいとと京都の地也、○又、善助と名をいひ、山陽具勤と  
陽の河、柏子の枝、けり、手と、善助と名をいひ、山陽具勤  
の教、善助也

○山陽の三村の花、と、善助と名をいひ、山陽具勤の  
山、紫の、白、雲、観、を、左、の、こ、と、い、ふ、

余自三月上、入京、寄食家、任、裏、傍、居、在、三、木、  
木、近、臨、鴨、川、隔、水、對、東、山、往、勝、正、面、如、云、秋、而、比、

叡亦不甚遠、裏所植楊柳數株、扶疎敷陰、一株之紫  
花卉亦弗斯、文錯各背、別置小亭、切在、水滑、最宜  
撫景、客來則捲簾凭檻、酒茶談論、每極娛樂、云  
(詩略)

○山陽、同人之概、二月、瀨、親梅の行を異、元保二年  
二月の下院、山陽、委曲の段取を、雪、森、共、  
此、行、梅、園、春、琴、林、谷、海、仙、節、  
唐、為、陰、壽、加、の、真、二、神、仙、の、号、文、林、の、決、櫛、と、  
此、行、在、家、の、行、と、有、ま、の、若、干、あ、ん、と、お、樂、の、  
状、里、を、叙、し、ま、り、と、ひ、と、う、蘇、國、の、日、誌、あ、る、今、  
ま、の、中、と、執、と、特、に、山、陽、の、動、静、と、聞、き、ま、る、を、お、す、

二月廿一日、京、小雨

山陽と林乃の聯句ニ云ク

衝雨探梅亦一、山陽、平林清曉待明時、

二十一日

春日山を張中、時山陽困疲し

會一村童牽馬而過、翁喜曰、天其也、即買駒

為、不復論償也

二十三日午後

五月川上

翁曰、於是、不可不、且、約、今日、壽、酌、丹、釀、  
莫、用、他、酒、一、滴、皆、曰、不、然、不、足、以、酬、此、花、也、春、琴、海、  
仙、接、筆、下、摸、寫、景、勝、大、際、

一目千本

復飲大醉而起

此行一取を以て伊丹酒數點を携ぐしめり  
尾上村

有村人其三平者、知宿來、請宿其家、曰吾家勝趣非  
此此院比也、櫻園曰宿不可改、如景勝不可不性見、  
有一亭、主乞其名於櫻園、名曰萬玉亭、夜  
歸院、宿復大飲、醉後海仙言、梅春琴弓作同行、我  
其三平、復求宿、出亭榜、及款無印、林谷曰我、  
刻之、而無杖、乃取甘藷、刻山陽二字、字體飛動

廿四

風雨大甚、以山徑隘、不得通輿馬、皆若蓑笠而步

三平山置一泊

翁前年一登櫻園春、琴弓林谷海仙為庵登山

宿二泊

翁莫茶宴坐也、遠夜呼酒談元、弘事、悦之矣

廿五

買舟 玉ありて、酒旨以坐、次作聯句、得二十款

後、以傾所、翁丹醜畫、四醉而志、二更、翁歸、三本木

翁謂余曰、彼溪山勝絕、不特梅多、可謂海內罕匹、

以其、以窮僻、識者甚少耳、然有其、實者、必得其名、

後、教十年、安知、往也、者不十、倍今也

元、北游の大概を知り、し、抗、孤、由、り、皆、厚、文、也

十月三十一日抄



○山陽と酒の記中、左の二事逸すべし

伊丹之酒、主乎醱釀、一度而為清、淡峻冽者、昉於鳩高  
翁、...、為性質宜其家造、陳而不失嗜飲、妙悟釀法、  
為家中微、新造清醪、曰泉川、其名於大噪、江戶  
評伊丹者、指必先屬於泉川、他名醱殆乎、避席、至  
或窺而擬之、云、文政己丑五月廿九日、病歿、年六十二、  
...、余雖未識翁、而識泉川、而親愛之久矣、不可謂  
平生、天塚鳩高翁墓碑銘

伊丹之酒、醱乎天下、而坂上氏最醱之、...、江都人呼  
坂上家釀曰劍菱、天下酒價低昂、皆視劍菱為  
準、逸亦呼其家曰劍菱氏、...、之書曰長古(長

古事記

○小野良卷の招月亭詩鈔に左の詩を収む

頼山陽先生近移三樹菴、誇林觀眺之美、不佞因野羨  
因寄如此

我愛鳥灘水石清、坐次君這裏、寄餘生何處、側立窗  
枕飽聽潺湲、第余愁

此詩を以て、昔、山陰句、...、左の如く改むべし  
...、山陽と酒の記中、情を漏らす

飽聽三樹微曉聲

山陽と酒の記中

三弦聲時、...、...、  
公所謂潺湲聲也

招月七亦茶坊の朝の能を云ふ

北去(蔡末カ)沈吟煥然、勳勳滿屋、這聽隔鄰、舞踏教り今冬久旱、無後淫淫教り、因免茶坊の朝不可解也

この茶院山陽自ら云、招月亭詩句を採てるハ分取す、且々疑と存しく、こゝの叔也

○菅(川田)竟依也、中云方今天日下文字以頼子成爲冠冕、子以爲何如、山陽自云花之九と云て可く

天下文章萃一家、長公最是。才多、別家逢人何不從、方今都下有東坡

山陽注云云く

(招月亭詩句四ノ九)

溢譽讀之使人面熱汗下、鴉子年(安永九)臘月生、梅翁東坡同物耳、中年以前不飲酒亦同、近過飲、然非究竟、非眞酒勝人也、坡詩云、少年久病怯杯觴、老去初知此味長、則這翁亦及老解此味也

山陽文名の感覚さうし日皆山陽を以て東坡に比す、山陽自らも東坡と同じ子の臘月に生んずを以て親しく、東坡に比す、地言の如くんば酒に於ても亦東坡と似たりと着す也、○戊申九月十七日重宿安得坊士の夜、近世儒者の印式に精しうしは山陽を推す、頼憲三印、頼氏子成る、一ツをうし、押十七甲、貴人、勤する時、この著るに用あるものと区別し、互々、一例ありと

以上山陽の資料も余が籍に多く漏れざるもの  
補遺を要す。此等の材料も近々木崎好吉に  
得たるものより、此等の家庭の「山陽」の記述  
三十八年夏の刊刊に依り、梅魁の日記と  
其の経緯を、冬に種々の事象を挿入し  
たるものより、此等の傍証を梅魁の遺文を  
と全部世に出し、其の所存あり、余は頃の  
此等の傍り得て初めて通読するを得たり。  
好吉所蔵本より多くの者入らあり、重版の際  
補入を期し、其の事あり、余は材料とすべし  
かの多く此内を在り、前二十数枚の材料は  
七三四番の間の各々、刊本（家庭の山陽）

無き所より、余が著いせんとする。此等の山陽の  
と専ら改刊の漏れざるを執味を中心とし  
て、其の偏りんとす。其の事あり、此等の材料は  
く之れより、余の著いせん所也

大正十二年十一月一日録



--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

